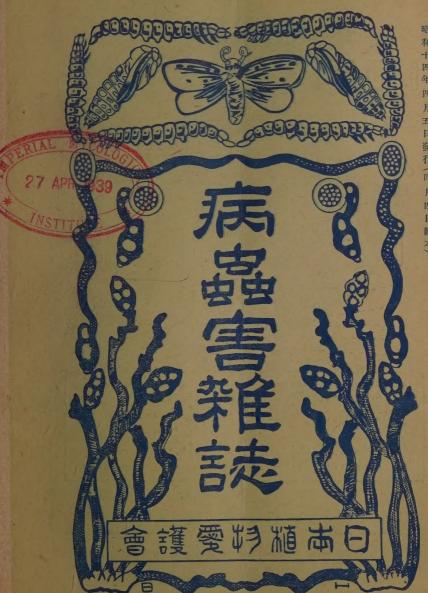
Vol. XXVI JOURNAL OF PLANT PROTECTION No. 4. (BYOCHU-GAI ZASSI)

April 1939



昭大病 E 月害 月 + 玉 日 發 行 第 (毎月 種 月 郵 四便 日 物 認可

號 四 第 卷六十二第 THE NIPPON PLANT PROTECTION SOCIETY,

Nisigahara Tokyo Japan

梅藏

法、防除試験成績等に直り解党する。病原。誘因。防除、他十七前被害立に防除の改革。分布、被害狀況。病原。誘因。防除用器具機械:第三綱各論(麥類の黑穗病其作、經病多さか。麥類の品種と病害。如何にして防除すべきか:、發病多さか。麥類の品種と病害。如何にして防除すべきか:不發病多さか。麥類の品種と病害。少類に寄生する病菌の音型目炎』第一個總論=麥類の病害。麥類に寄生する病菌の主要目炎』第一個總論=麥類の病害。麥類に寄生する病菌の主要目炎』第一個總論=麥類の病害。麥類に寄生する病菌の

十五十百一十一季 錢錢個頁

「主要目入」第一編総論―六章…第二編殺菌劑及 防除用 器具(主要目入)第一編総論―六章…第二階除一病書防除法―二章…第書防除香・主要作物・樹木の病書・疏奈類の病書・時用作物の病書・現樹類の病書・疏奈類の病書・時用作物の病書・果樹類の病書・教授が―二章…第三編病書防除法―二章…第三編殺菌劑及 防除用 器具(主要目入)第一編総論―六章…第二編殺菌劑及 防除用 器具

店

令#三錢**假**大圓 百廿 (实

第五章品種と病害との關係へ二節 期の 象と病害との關係 福排水・傷害・殺土の深哉と病害・連作と病害・混植。 無 章病害防除用器具機械(四節)章殺菌劑の種類及其調製法(三 章誘因=肥料と病害・播種期又は移植期と病害發生・ 章病菌の傳染及傳播の方法(二節) 章病菌の寄生方法及其生活狀態(二 章病害の意義 菌劑及防涂用器具機械

の注意・輸作・混植・種苗の選擇・免疫性品種の選擇・章間接防除法=滋排水の注意・配料の配合及施用時一 病害防除法

第第第 附四三二

章穀類の病害=稻熱病。稻胡麻葉枯病。稻白葉枯病・

農作物病害防除の實際問題を縱横に論斷解說す

(著者

二十年間

0

體驗誌

欇 菊 組 一枚 t . t 拝圖百五

第二章直接防除法=殺菌劑の撒布・土壌の消毒・種苗の 毒・貯藏庫又は貯蔵穴の消毒・內科療法・外科療法 遮斷法。中間寄主植物の除去。病作物の處分。手足及農 0 町木ツー

四 七

具の消

病害防除各論

且丁三臺河殿區田神市京東

= 九八 〇八五〇 京田 验 0

區坂赤市京東

の殺 西 行 6



社會式株藥農本日

茶種菌核病に關する試驗	室柑瘡痂病豫防と新殺菌劑の效果に關する試驗	夏蜜柑潰瘍病豫防試驗	温州蜜柑潰瘍病豫防に關する試験・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	小麥穀質線蟲病に闘する試驗 愛知縣立農事試驗場(吾)	大分縣立農事試驗場(臺)	小麥萎縮病に對する耐病性品種の交換栽培	小麥立枯病土壤消毒試驗:愛知縣立農事試驗場(三)		小麥腥黒穗病菌の系統と品種に關する試験愛知縣立農事試驗場(三)	稻苞蟲藥劑驅除試驗愛知縣立農事試驗場(五)
害○桑園のスキ蟲狩新法○麥の雪腐れ發生	○稻熱病螟蟲泥夏蟲防除費追加計上せらる○小麥病害	●雜 報	技手野口德三(光)	青酸瓦斯燻蒸法に闘する研究(四)		苗稻熱病に闘する試驗成績(一)稲熱病に闘する研究成績(第五報)	●雜 録	- 芍薬の班葉病驅除豫防試驗 		鑑豆象蝨に闘する試験

3
病
161
-
蟲
中中
men
13
害
T
20.20
雜
士田
AL
2- 7-
誌
EDILY?
第
功力
1
THE REAL PROPERTY.
-
100 100
+
100 m
0100
六
1
172
卷
72
2.2
第
功
/
THE PERSON NAMED IN
四
-
The sale
PE
號
111/1
E
-
500 mg
73

苗代に於ける苗の罹病程度並に播種量と稻熱病 との關係 ● 説

春季病蟲害防除週間ポスタ

〇口

繪

時局下に於ける小麥の病害防除に就て…

ト藏

梅

之 丞(三0

小麥銹病の小麥收量其他に及ぼす影

各種針葉樹材の耐朽性に就て……………… 農學博士 北 島 君 紫雲英施用方法と稻熱病との關係試驗 ………………

紫雲英施用量及石灰施用量と稻熱病との關係試驗 …… 稻熱病被害輕減に關する試驗 岡山縣立農事試驗場(四) 岡山縣立農事試驗場(完)

大二十八星瓢蟲化生增成因の研究…………

水稻品種の稻熟病耐病性並に其の特性と 肥料配合量試驗

岡山縣立農事試驗場(量)

岡山縣立農事試驗場(四)

愛知縣立農事試驗場(至0)

農學士 明 日

111

資

野 本 慶 造(三六)

農藥に關する最近特許(二)・

自家製大豆展着劑の調製法に就て………

島

昌

1 (1111)

ボルドウ液の濃度稀薄化に就て…………

方

末

彦(三)

バチエラー・オブ・アーツ

1/3

山昌之介(八)



神讃い

てっ買いなの違間

器霧噴の瓶重二

好評!

【牌金省林農】





機霧噴力動種 各及 (星進錄型)

地番六目丁二通區橋本日市京東 部器噴霧所業營京東 at 器火消瓶重二

番四三八一・番二一○二(橋本日)話電番七九○○六京東座口替振

4社工場 大阪市西淀川區大和田町



說

林

(禁 輔

載

各種針葉樹材の耐朽性に就て

農學博士 ·北 · 島 · 君 · 一

木用 2 25 は て誠に腐 事 其 なものとなって居るが、 得 耐 がは出 る事であ 朽性に富 の理由に就て曾て發表し 材として使用 森 V もの 地 來な り難 方に生育 として家屋の土臺や鐵道枕木とし vo んで居る性質 つて邊材は必ずし v 事は誰 する L 例へば昔から た場合各種の針葉材に で E も知つて居る事實 2111 はヒ 其の邊材 (椐)は建築用材叉は た事があ も同 110 クリ材は非常に腐 0 心材に就 は叉反對に極 であ る。併し此 ると云 比較 で、 て貴 て云

> 材の 富む 材は て其の邊 叉さうし 8 驗 7 腐朽 此 耐 もの 腐朽 成績を弦に紹介して御參考に供し度 0 朽性に疑 實驗 では 材部が非常に早く腐 た考へから邊材 し難いと云ふ觀 易 は ない V 昭 0 を挿しはさむ人さ 和十年に完了して居たが かと云ふ事 も亦 其 を含むヒバ 念から邊 0 朽す を時 例 7 るの 々耳に、 一材も亦 あ あ 丸太を使用し る。 るか を見て いいの する 耐 併 朽性に 或 6 ヒル る事 私 E

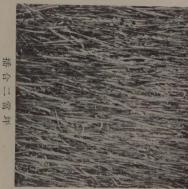
説 林 各種針葉樹材の耐朽性に就て

の爲め未發表の

儘で置い

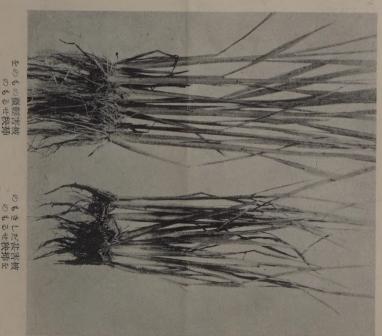
(門岸柳底)





係關のと病熱稻と量種播に並度程病罹の苗るけ於に代苗

をのもの微輕害被のもるせ秋挿



り材盛 腐はに

ケレグワ 定 タガカイコ の際 あ 0 3 8 及廿及 ケラヒロゲ 種朽 7 整 0 3 1 類菌 觀 3 礎 2 力工 多 號番 12 2 を飲 無 6 設 T 五五四四五五 前試 量氣 g.乾 驗 大 な 其 E 1 vo 林 驗 な 事 0 3 v 結 各 各種針葉樹材 る 力 事 前試驗 量絕 果 5 種 7 g.乾 調接 二字二字字 交**至**北嵩**2**9 達 年 0 3 から あ 後試 重 查種 條 常 驗 は 朽 70 6 0) 無 性 件 あ g.重 同昭 減 での問題でき 量 和 0 耐朽性 V は 十九 2 各 於 製 型 製 型 等 数 等 大 年年 157 體 數 材 併 九九 に就 月月 材 2 0 共 一一一四日 減平少 恩·六 試 方 先 結 価 8 0 +-果 異 う 率均 示 日日 寸 な 3 ただ延各 絕 る 內 しし號 備 h くて共 較 體 03 腐材菌 7 す 朽は絲 推 し甚蔓 タガカイコ の腐 ケシノサッ リフシ ケラヒロゲ 種朽 カコルガ 47 類菌 學學問元表是 高元大宝民宝 高宝宝二号 重 +" 型型型型型 型表三量量 前試 驗量絕 g.乾 檢接 查種 重 四言言言 和 十九 年年 152 九九 減平少 月月 七九・三四 五二四 型。 歪 率均 日日 朽全發菌 同 では大菌 し蔓菌 も育菌 大體育絲 備 あ極で絲るめ材の 大し絲 で材は 亙て旺 考 ての蔓 上 あの良

る腐役

猛腐延

烈朽は

しは盛た烈に

實験に使用した材と木材腐朽菌の種類

比較として使用したが、 外は全部内地産のものである。 私は此の實驗をやるのに次の テウセンカラマツを除く 如き各材の邊材を

u % Thujopsis dolabrata Sieb. et Zucc. var. Hondai Ma-

アカマッ Pinus densiflora Sieb. et Don カラマッ Larix leptolepis Gard

ヒノキ к ¥ Cryptomeria Japonica Don Chamaecyparis obtusa Lond

テウセンカラマツ (平安北道東部) Larix dahurica var. corena Nakai

此の して其の腐朽程度を比較した。 各邊材の各々に次の樣な六種の木材腐朽菌

コゲイロカヒガラタケ Lenzites abietina FR

イテフタケ Paxillus Panuoides ER ワタグサレタケ Paria vaporaria PERS

7 7 Polyporus sulphuneus ER

ツガサルノコシカケ Fomes pinicola FR

Lentinus lepideus FR.

する試驗の方法としては以前から各種の方法が實 木材の耐朽性を成る可く早く比較

て決して理想的のものとは考へてゐない。即ち同

たのである。此の方法は耐朽比較の試驗方法とし

驗後の重量を引き其の差から減少率を算定して其

もの程耐朽性に乏しいものとし

の減少率の大きい

にして其の重量を測定して、

試驗前の重量から試 再び之れを絶乾狀態 試験材の表面に發育 夏は自然氣温に從つ

て約一ヶ年を經過してから、 攝氏二十五度の定溫器內に、

して來た菌絲を叮寧に除き、

の二ヶ所に二―三箇づ、接種して置いて、冬は約 て三角フラスコの底部の鋸屑の上と試験材の頂部 基に培養してある腐朽菌絲を寒天と共に切り取つ 置いた試驗材を入れ消毒をする。尚別に寒天培養 八〇の蒸溜水を加へ、之れに初め重量を測定して を測定して置いて、別に三○○ccの三角フラス 5 ち各材邊材部の完全な部分から成る可く木目の コに約二五グラムのブナ鋸屑を入れ之れに七〇― 法もなかつたから結局次の如き方法に從つた。 定する様に 此の試驗材の氣乾狀態と絕乾狀態の時の重量 て居るが之れといって準據す可き適當な方 2×1×6「センチ」の大さの試験材を採 卽

五

102 103 104 104 105 104 105 104 105 104 105 104 105 104 105 104 105 104 105 104 105 104 105 104 105 104 105 104 105 104 105 10							
10 10 10 10 10 10 10 10					ゲー種様	ý	
1		吴昱高宣言	言元元元二	西里里			
***		******* #25±26		七七七七章	七七 前試	量氣 g.乾 東	〇四四显著元
1		走岩高元兒主	六六六七七六 空七二皇元門	四四四四四	· 門 剛 圖	量絕 ッ	ララララ ララ ち生生 <u>た</u> 主
一つの 要 A A B A B		 	エカ芸芸器の	五五四	後試 後試 驗	重	県金全大高諸
1元			李四四四本四 - 完全全基問	 	g.重 六ち 量	減同昭	声名允主叹息
まっこ		六六五五五元 六十二十六七七七七九〇九七十二十六七十二十六七十二十六七十二十十二十二十十二十二十二十二十二十二十二十二	电完全交电交 主完合美元率	三言 壽 吳二 全	高元 率 】 查完%	小 十九	
1日 1日 1日 1日 1日 1日 1日 1	Ì.	35.	-E		15	平 月月	五五
上		同	も育絲	い腐盛	絲備	7 月月	亦で絲
カコルガ		:1.	起材旺 、だの盛	はる 大も	發 · · 考 育	;	だの發し腐育
カコルガ							
三元 1 1 1 1 1 1 1 1 1							
東							
(本) (**)		ケラヒロゲ	種朽 類菌		7"	カコルガ	ケス
1		ケラヒロゲ 一二二二二二三二二二二二二二二二二二二二二二二二二二二二二二二二二二二二二二	種朽 類菌 號番 前試 g.乾	カラ	フツー	カコルガ	ケス 三三三元元元 三三三元元元 七七七七五 三四元元元 三三元元元
1		ケラヒロゲーー 一型に関係を 一型に関係を 一型に関係を 一型に関係を 大学の大学の 一型に 大学の大学の 一型に 一型に 一型に 一型に 一型に 一型に 一型に 一型に 一型に 一型に	種類 器 最 報 報 報 報 報 報 報 報 報 報 報 報 報 報 報 報 報 報	マッ	フッ 国	カコルガ フラス フラ フラ フラ フラ フラ フラ フラ	ケス 1 = 1 = 1 = 1 = 1 = 1 = 1 = 1 = 1 = 1 =
1		ケラヒロゲーー 一型に関係を 一型に関係を 一型に関係を 一型に関係を 大学の大学の 一型に 大学の大学の 一型に 一型に 一型に 一型に 一型に 一型に 一型に 一型に 一型に 一型に	種類 號 看	フマツ(接	フッ 国	カコルガ 	ケス 三三三二二二二 三三三二二二二二 七七七七七五 三三三二二二二 七七七七七五 三三三二二二二 七七七七七五 三三三二二二二 七七七七七五 三三三二二二 〇〇次次次次次四 三三三二二二 三三三二二二 七七七七七五 三三三二二二 〇〇次次次次次四 三三三二二二 三三三二二二 三三三二二二 〇〇次元 二三二二二二 三三三二二二 三三三二二二 〇〇次元 二三二二二 三三三二二 三三三二 〇次元 三三三二 〇次元 三三三二 三三三二 三三三二 三三三二 三三三二 三三三二 三三三二 三三三二 三三三 三三三二 三三三 三三三 三三三 三三三 三三三 三三
空・ス・ス・ス・ス・ス・ス・ス・ス・ス・ス・ス・ス・ス・ス・ス・ス・ス・ス・		ケラヒロゲ 一型	種類 號	フマツ(接種 昭和	フツー 120 セ・0.1 マー・120 セ・0.1 マー・120 セ・0.1 マー・120 ロット・120 ロット・1	カコルガ コニュー スペース エモ・ルス エー・ルス マー・エー エー・ルス エー・ルス エー・ルス エー・ルス エー・ルス エー・ルス エー・ルス エー・ルス コニュー エー・ルス コニュー エー・ルス コニュー エー・ルス コニュー エー・エス エー・スカット エー・エー・スカット エー・エー・スカット エー・エー・スカット エー・エー・エー・スカット エー・エー・スカット エー・エー・スカット エー・エー・スカット エー・エー・スカット エー・エー・スカット エー・エー・スカット エー・エー・スカット エー・エー・スカット エー・エー・スカット エー・エー・エー・スカット エー・スカット エー・スカッ	ケス 1 元
H	ī	ケラヒロゲー 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1	種類 號 計廠 試驗 試驗 武廠 武廠 武廠 武廠 武廠 武廠 重量 處	フマツ (接種 昭和九年	フツー(20 セ・)元 ヤ・)元 (20 ロー・) (2	カコルガ ココルガ コニュース・ハーエニース・ハーエニース・ハーエニース・ハーエニース・ハーエニース・ハーエニース・ハーエニース・ハーエニース・ハース・コース・ロース・ロース・ロース・ロース・ロース・ロース・ロース・ロース・ロース・ロ	ケス 11元 セ・四回
亦で旺 労 考 なのた旺 亦で旺 なのた旺 大村盛 原ど い腐け盛 大村盛 い腐け盛	ī	ケラヒロゲ 一型	種類號 計職 試驗 重量 溢 少 平域少	フマツ (検査 同 十年九月二十年九月十	フツー図 センガ ヤーボース Man	カコルガ ココ ルカ ココ ルカ ココ ス エ ・	ケ 12七 年・00 四・四回 二・七人 12七 年・00 四・四回 二・七人 12七 七・四回 ペ・四回 ペ・四回 ペ・四回 ペ・四回 コ・七〇 二・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・
	ī	ケー 1型 平・21 四・4 1 1 1 1 1 1 1 1 1	種類號 計廠 試驗 試驗 試驗 試驗 試驗 試驗 試驗 試驗 試驗 武驗 武驗 重量 本 減少率 減少率	フマツ (綾種 昭和九年九月二十	1元 七・元 か・1元 四・元 1 ・元 1 ・元 1 ・元 1 ・元 1 ・元 1 ・元 1	カー 1 三 ベ・人 ユ エ・	ケ 1元七 ±・00 四・四回 セハ 1元 七・四回 水・四回 四・四回 ・ ベー 1元 七・四回 水・四回 四・四回 ・ ベー 1元 七・四回 水・四回 四・四回 ・ ベー 1元 七・四回 水・三次 四・四回 - 1 - ・ 六 1元 - 七・四回 水・三次 四・1 - 七・四回 コー・ベー 後音 1元 - 1元 - 1元 - 七 1元 - 1元 - 1元 - 1元 1元 - 1元 - 1元 1元 -

ケレグワ タサタ

						_
	当当古党交至	交至符至空空	 6 6 7 7 7 7 7 7 7 7 7 7	毒垩垩平恶児	罗里西里西西	H.
とノ	三四三四三三 九二五二三四 九二五二三四	메메르르르르 요요습감수요	루루루루루루 루로 루르루루루 프로 및 및 및 및 및 및 및 및 및 및 및 및 및 및 및 및 및 및 및	□ 三 三 三 三 元 元 元 元 元 元 元 元 元 元 元 元 元 元 元	海三三三三三 兄 型公立公立	L .
検接	三年三年三年の日本会会会会会会会会会会会会会会会会会会会会会会会会会会会会会会会会会会会会	ユニュニュニ 空空 王 玉 こ こ こ こ こ こ こ こ こ こ こ こ こ こ こ こ こ こ	#===== =0000==	章 弄 弄 弄 弄 弄 売 空 元 三 0 三 0 0 0 0 0 0 0 0 0 0 0 0 0 0 0 0	马马马马马马 公司 第三九〇五九	: A
查種	・・・・・・・・・・ 全をご完全	益差谷本主竺	111829	请表符字表符	20-00c 全全立空生大	
同昭 和九年十月月	二····································			キューニュー・ 金室空景から 北ムム北ムム・ 金属景量表量	ラニテニュニストランスでは 大生穴でも大 七三尺の至三	
二十月	三章	五 五	; 	<u>^</u>	宝品	
	も盛蘇 森で材の競 だ材の競 し腐育	大盛菌で緑がの一般では、一体の一般で	結カ途 果ビ中 不混か 明入ら のア	同上	村全發菌 大體育経 に で で の は で の は の は に の は の は の は の は の は の は の は の	
	い朽旺	朽莊	∞ 為ヲ		腐はに	
ケシノサンカコルフ		ケフイ・タテ	ケレグワタサタ	タガカイコ ケラヒロゲ	の腐 種朽 類菌	
皇皇帝先次	2 类型品型型型	2	高金金金金	大岩类蓝岩		
20三六五	元 吉夫夫帝乌		完全的	空主大語言章	/ 但	
マニュニュー 岩湾尤之七						
きまきまき	 - 2003±±±		· 內盡華	二三二三三三 九〇九一〇三 九〇九九〇二		
デーラー 四元 四元 四元 元元 元元 元元 元元 元元	三 0000000	マーテー デュー 主義 生容門 一手空	デーデー ・	2000000 老務心完養為	g.重 量	
至至空 完 之 之 完 完 完	窗 号号大二量器 表 表言皇帝大学	古古兴 空宫 美丰二十宝	二篇元 · 量型式	元七二五五元 生元三台高	*** 少	P
益.0%	元	元	△ 為	平	減平 少 率均	
も盛菌亦で絲	ら材發菌ずは育絲	が ・ ・ ・ を 終	析發菌 結ア ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	た端微菌 稍弱絲	備	
提材の だ腐腐 し い 析 い	腐しは 柯た旺 大る <u>盛</u> なもに	亦での 大材發 の育 腐は	亦世だしい 不不明 の腐に	々での 腐材發 朽は育 し一は	考	

ジオマフツ

ケシノサツ カコルガ

タマケス

ケフイタテ

pц

の盛 腐に

驗 の 結 果

上表 示 4 を表示す 12 内 か B ると次 各樹 種 邊 0 通 材 が 6 0 各 あ 朽菌 る。

各樹種 重量 憲減少 ||率(%

ス # 77 マカ ッラ カテ ラウ

七十七

ツン

無

7

類菌

E

イデ E = ダ .7 シガ ガゲ **プラダ** カサケル 190 オ フ フ 及 サ テカ 4 E ... 型-垂 悪O・Qへ 黑·六 <u>八·三</u> 光-三四 五河。五 宝・品 五五。九一 金・会 究-五 一七一五四 一九人公 元-三 五:10 七十二 图10-01 金・六 元·00 二三言 空-吴 空· 晝

邦

ガ

材は 弱 なる ス 猛 ウ あ 4 0 セ 此 差 0) 2 V E 事 如 腐 \$2 は 力 270 材 が 其 8 朽 ラ B 績 邊材 3 B 3 0 窺 7 心 は 0 初 n " 朽 3 材 判 n b T 0 場合 17 る 其 ٤ 易 然と判 る 0 V 卽 邊 其 B 2 がたて 叉心 材 ち 0) る様に 針 他 まし は著 集 材 判然 至 ۲ スギ、 樹 腐 1 0 材 耐 朽菌 1 丰 分 朽 V 0 力 力特 極 n 力 ラ 別 柘 ラ 7 性 其 は 來 7 77 先 る 腐 7 0 7 强 B

朽菌 から n 產 サ V 出 B 中 3 大 IV 腐朽 車 部 0 と見 る。 は 分 = 力 者 針 力 0 7 葉樹 差支 强 が 41 曾 大 な あ 7 0 7 實 心 及 3 る 材 B 里 1 サ 0 は之等の V は た結果 2 尽 尙 實 ケ 1 菌 驗 でも窺知 6 テ あ では腐 12 フ 供 13 朽 す た 腐

林

	ジオマフツ	ケシノサツ カコルガ	タマ ケス	ケフイ タテ	ケレグワ タサタ	
	公元大七六 並	满堂生生苦究	交至交至高空	至二十二章	英亚馬亚基基	說
カテラウ	なななななな。 帝大登量別末	されたななな 言言元元言垂	추주주주주주 얼룩스들프를	추가추추추추 추열등들층요	次次次本本 点型 ⁰ 元七六	林
マセツン	平五五五五五四四世之世四世	展点基本基本。 四〇六五六七 四〇六五六七	E.E.E.E.E.E.E.E.E.E.E.E.E.E.E.E.E.E.E.	平四 平 平 平 平 平 平 二 七 表 云 允 四	五五五五五五五五五五五五五五五五五五五五五五五五五五五五五五五五五五五五五五五	各種
漁接 査種	三二二二二二二二二二二二二二二二二二二二二二二二二二二二二二二二二二二二二二	ラーニュニュー	三三三三四三	110世紀元	デザデーデ 一元大名実表	針葉樹
回昭 和	三丸四	デデーデー 空気空元量の	 	四号号号四号	ラフランマニ 塩塩両来売売	材の耐
十九 年年 	電量型 主決立	できた。 できた。 できます。 できまる。	三量兰兰岩 完完完全量也	究於高克兰古 查高200三金	空冷无型盟皇 元20三金只	朽性に
月月 五十 三	录。	垂	ē Ā	·	五 · · · · ·	就て
III.	るのア村旺菌為ア村旺菌系の対域の大力のでは、大力・イン・イン・イン・イン・イン・イン・イン・イン・イン・イン・イン・イン・イン・	い が に 菌 は は が が は は が	- 朽 酸 菌 も 育 終 稍 し は	烈旺菌 に盛終 腐での	腐残菌 「有経しは	
	の記べ 初級 と混大の育 な入 腐は	甚材幾 だの育 し腐は	々材旺 大の盛 腐に	析材發 しは育 た猛は	亦て旺 大材盛 のに	
ケシノサツ	タマ	ケフイ	・ ケレグワ	77 .3.4 .3	e i	
カコルガ	72	タテ	タサタ	タがカイコケラヒロゲ	の腐種朽	
言党党最高			型型型公式公司	桑金益金至	類菌。	
では、一世界のでは、		主國語言問望	型空空型 畫書	四四四四四四四 三尺元章主義	前試}量氣 g.乾重	
辛辛四季辛辛 蚩尤七公公公		· 弄弄弄弄弄 · 公公宅完公宝	三四四三三四 宝宝公公三	三三三三四三 宝九宝八〇之	前試)量絕	
空気が空間	七二七九四三		心光光之三老	 谷與皇宗增益	後試 後試 験 g·乾 重	
三二二二二 壹音失吳完三	2-0	デーデーデー 亜	デーニーニー 宝笠天交き量	ラララララウ 宝型高牌を豊	· · · · · · · · · · · · · · · · · · ·	
空空	言言言 言言言 言言 言言 言言 言言 言言 言言 言言 言言 言言 言言 言	高空生立され 金元高高七〇	港空 空党企 型 壹全全党問皇	表立為空天 是企会主流量	** 一少	六
100 Pt	· 图	至美	- E	* * */	減平 少 ※約	
- 朽後菌 も育絲	朽 後 菌 も 育 絲	同	同	大朽 後菌 も 育絲		
しは 大材旺 の盛	稍しは 々材旺 大の盛	, E	ı, ;I	・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・	備考	
腐に	腐に			で腐に		

林

大二十八星瓢蟲化生增成因の研究

るに、 は此 穫され 茄子、 於て羽化出現せる、 h 6 なるべし。 ものは羽化 化期の蛹態にあ 次表より考察する時は、 月下旬、茄子は十月中旬概ね收穫の末期に なすことに依 植物を植 野外試育框を被覆せる中に移 0 12 て玆に尚一世代を營む可能性 今水原 、日輔 點を明かに それに依 其 0 より容易に考 たる莖葉に附着して羽化し第二 馬鈴薯夫れ夫れ 八月八 昭和十二 に於ける作物關係を見るに、 以後は茄子或は し第二世代を完成 れば第 6 日產卵 九月八日羽 一年七 る時なり。故に此の作物にて早き たるものに 第二 月二十七日、 へられ 一、表の 一年三囘の世代 共に外氣と同 化 馬鈴薯の作物上にては二 同月十三日孵化、 如く、 イイ . 發生の る。 し、三十 して、 ヌ し得べきも、 ホ 狀態を記録せるな た 實驗第二(第二表) あることは第一表 50 馬鈴薯の葉上に ホ イ 框 成蟲を、 本表を説明せ ヅキの類に移 ヌ 一日に ホ を営め 樣 囘の出現と 今經過を見 赤 の装置 他は收 して、 ヅキ 茄子に 同 60 中 月二

> 素の 於て考察せんとす。 於ては馬鈴薯より茄子に移 むることもあらんと考 態を完了せり。 相伴 の經過を經續 3 もの あ 仍て本表 5 す て、 るなり。 へ、此の關係を氣象の項に 世代の より觀 6 72 然し之れには 持續を可能 る場合、 11 100 水 事實第 ならし 象要

時は、 後の經過を觀察せり。 考の爲附記す。 過を營むこと困難なる一例ともならんと考へ、參 第三齢迄進みて全死せり。之等の瓜類にては、經 胡瓜に於ては に於ては産卵後孵化せしも、二日にして全死し、 は産卵、孵化せしも間もなく全部死し、西瓜、越瓜 を以て、 馬鈴薯收穫の頃、 能 昭和十二年之等に野外飼育 く之等の作物に集まり攝 產卵 し、孵化後の生育可良なりしも、 附近に南瓜或は瓜類 それに依れば、 食する狀 框 南瓜に於て を被ひ を見 畑あ 其

野外飼育實驗(昭和十三年)

大二十八星瓢蟲化生增成因の研究

朝鮮總督府農事試驗場技師 中 山 昌 之 介

外に の要素存在するものと考へ、今之れを食餌 と平行するやう工夫し、室内試育を爲したるに、 あり、昭和八年村松茂氏の報告(3)せるものも一年 内地の發生は一―二囘の地方最も多く、一年に最 一年三囘迄進み、野外試育の 三囘となりあれり。著者の試育方法は室内竝に野 て著者の試育せるものは、三囘迄經過を營むもの 大三囘迄經過の進む記錄なきも朝鮮は水原の地に ULSKY は發生回數に於て內地、朝鮮間に相異あり 發生地方に、朝鮮は全土に、大害を與ふる大二十 八星瓢蟲 Epilachna vigintioctomaculuta Motsch て水原の地には蟲の成育促進上影響を與ふる處 馬鈴薯、茄子等の主要害蟲として、内地は其の して、室内の飼育進み勝の時は、野外の經過 もの亦同様な 一並に氣 りきつ

要素に索めて實驗せり。其の成績を紹介するこ

自然環境下に於ける發生狀況を觀察することとせ

朝鮮固 れば、 茄子、 し。此の見地より著者は、先づ之等の 狀況を觀るに、最初は馬鈴薯、枸杞の類、 野生植物として嗜むものなり。之等の植物に寄生 は栽培作物とし 科に屬するもの一種を含む。 十六種類あ に属するもの四種、 と次の如し。 ホホヅキ其の他に答食し居たりと見て可なるべ 本種の食餌となるものに、水原地方に於ては、 イヌホ 「有の在來種と觀られ、馬鈴薯は輸入植物な 朝鮮に栽培以前に於ては、茄子、 9 c ホヅキの類なり。大二十八星瓢蟲は て最も好み、イヌ 茄子科に屬するもの十種、 陽 荳科に屬するもの一種、 旋花 其の中馬鈴薯、茄子 ホホズキ、枸杞は 植物に就て 枸杞、

經過を營み得る植物あること。

馬鈴薯收穫後も茄子、

ホ

ホッキの如き

なり、 ては個體に依 月の候に於て內地の對象地方に比して長きを知る 十月の間 濕度に於て水原はまた内地の夫れに比し五 此の事がまた發育速進上影響し、 一般に高きも、 6 一年三囘迄も世代を営むなりと考 濕度の多少は極端なら 、水原に於

かっとい 以上が大二十八星瓢蟲化生增を來す主因となる

參考文獻

(1)高木三郎、伊藤孝三郎、大僞瓢蟲に關する研究、 農事試驗場、昭和七年三月

(2)田邊忠 一、關谷一郎、熊谷叉吉、大二十八星瓢蟲の生態並

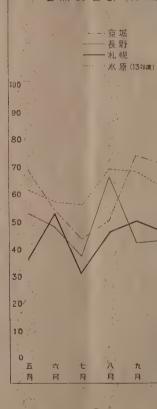
十月

長野縣農事試驗

に驅除豫防法、

5

餘り影響なきものと思惟す。



3)村松茂、 年二月 昭和九年三月 第二號、大正八 ジュヤホシ、病 場報告第五號、 蟲害雜誌第六卷 オホニ

4)田邊忠

郎、大二十八星瓢蟲の生態に就て

(అ)Takahashi, S: Studieson Epilachna Lady Beetles (6)中山昌之介、朝鮮農作物主要害蟲と其防除法、朝鮮農會、 in Japan, 東京農業大學紀要第三卷、昭和七年

昭和十四年四月

林 大二十八星瓢蟲化生增成因の研究 月の氣溫高さこと並に九一十月に於ける日照時長

水原に於ける五月の日照時長く、

叉五

世代數

產卵月

蛹化月

羽化日

	*	_	馬	7 (18		茄		ツホキホー~		
第二	_	化	化			化			化	
表	VIII.	VII		VII.			VII	VI		
大二十八	r‡ı	中		rļa	上、中		中	E-F	.].	
、星狐魚の平	rļı	tļa	幼蟲接種九	下	茚	幼蟲接種 九	中一区	中	幼蟲接種九	
	IV, 下	TY.	T T	X Ł	五十一四上	中下	巫上中		-	
	K L	T.	T T	143 IX	YII L	VI F VI L	区上中	型上——以上	F.	

二表 大二十八星瓢蟲の經過と野外

四月下旬より十月上旬迄夫れに該當せり。高木、度乃至二十八度の間に在りとせば、昭和十三年は本蟲生活の適溫を水原にては、假に攝氏二十二

次に第四表を見るに、

水原の日照時五月と九・十

期は長野のそれに比して、約十日早進するなり。

きなり。

高温は

發育速進上大いに關係あるやに考へられ、春期で並に九月中旬より十月に至る氣溫が高さことは、

し。今第三表に就いて考察する時、水原の五・六月

三化期に於ける經過を可良に導く要素となり得べ

化期に於ける蟲の發育を、秋期の高溫は

其の爲か水原の一化期に於ける別化最盛

氣象關係

言へり。之れを參照する時水原の氣溫八月の候に 八度(で)に於ては能く産卵し、孵化もよく行はる 伊藤 高さことは蟲の發育速進とは關係なきも 七一二八度(で)なりと言ひ、高橋氏(5)は二二十二 著者の次に示せる第三第四表に就ても能く説明し 蟲の出現期たる、五月に於ける最低溫度並に平均 得べきなり。本蟲繁殖の適溫福島地方に於ては二 八月以後の日照時の減少の爲ならんと。此の點は るも三○度に至れば、 温度なりと。 支配するものは、 (1)氏等の説に從へば、 又內地で發生年一囘に止まるは主に 最寒時の温度にあらずして、該 産卵を爲せども孵化せずと 發生の多少及遲速 如

かるべし。銅を節約せんには、左に示す三項より他に方法な銅を節約せんには、左に示す三項より他に方法なを要せず、而してボルドウ液に消費せらるし硫酸

一、從來よりもボルドウ液の撒布回數を減ずる

ずること。

にすること。現在使用されをるボルドウ液の濃度を稀薄

節約量には大なる期待を持ち難し。又撒布量 少は現在農家の撒布狀況を知れる者の容易に提唱 すべきものなりと思惟す。 と云ふが如き濃厚ボルドウ液を稀薄化して、 し得ざるところに しき今日俄に奬め難き事情にあり、且又之による り多少可能の場合あるべきも、 斯く觀じ來たらば、 布囘數の減少は病害の種類農家の慣行等に して、 結局現在の三乃至四斗式 寧ろ增量

を

奬むべきな 生産確保の叫 あ減 CX t

ニ、ボルドウ液濃度の變遷

最初のボルドウ液は恐ろしく濃厚にして硫酸銅

ルドウ液の濃度稀薄化に就て

八%、生石灰一五%(水一斗に對し硫酸銅三・二封 次でミラード氏等は一乃至二%液 度、生石灰六封度)なりしと云ふ。 蓋し當時は箒を 五合乃至二斗五升式に相當せるなり。チェワイフ 硫酸銅四八匁乃至九六匁)を用ふるに至りたれば 用ひて撒布せしものなれば之れ當然の事ならん。 233-234, 1913) 一八八八年に發表されし米國農 Insecticides, Fungicides and Weedkillers, pp. 病豫防試驗を行ひ、〇・五%液(五斗式)にて効力 (二石五斗乃至一斗二升五合式)を用ひて葡萄露菌 ラー(ZWEIFLER)氏は〇・一乃至二%ボルドウ液 吾國に於ける現在の濃度指示法に從へば一斗二升 は苹果樱桃等藥害を蒙り易き植物に限られをるが 今日に於ては一般に普通液を用ひ、 しが、其後一八九六年に至り普通液は 灰四封度、水二二ガロン)と云ふ濃厚ボ 務省の調合量も 6―4―22 (硫酸銅六封度、生石 充分なりとの結論に達せりと云ふ。(E. Bourcard 濃厚液は 6-4-50 式、稀薄液は 2-4-50 式となり著しく稀薄化せり。 (水一斗につき 稀薄液の使用 ルドウなり 4-4-50

ボ F ウ液 の濃度稀薄化に就

山 縣立農事試驗場技師

方

量を減ぜる薬劑の撒布によりて、 には、 6 害豫防可能なるや否やにつき多數の質問を受領せ 省は銅劑以外の藥劑若 段は二 **卷頭に述べて曰く。「一九一六年(世界大戰三年目)** せる殺菌劑に關する報告 化學技師下•()•ク 量の銅分を含みしかも標準ボ 劑に關する既往 叉新 然るに重要病害の豫防に銅劑と代り得べ 十五乃至三十セントに高騰せしかば、 國內の或る地方に於ける硫酸銅一封度の値 合衆國農務省化學局殺蟲殺菌劑研究室生理 殺菌 Dept. Agr. Bull., no. 866, 1920) & 国劑の 、探出 の試 ック氏、 一殿研究は悉く失敗に終りを も望み薄 しくは標準よりも硫酸銅 (F.C. Cook; Pickering 世界大戰終了直後發表 ルドウ液 きを以て、 果樹及蔬菜の病 より 寧ろ同 き殺

銅分の如きも極力節約に努め、以て時局の要求に 判明し にあるなり。 の病害豫防は依然として銅劑依存の の見解は微動だにせずして、今日尚ほ重要農作物 もその効力は銅劑に比すべ 饂飩粉病菌の特効剤との 力顯著なる銅劑を捜すこと時宜に適せりと思惟 云々」と。 ざるべ 々切なるもの 銹病其の他二三の病害にも頗る有効なること 又新殺菌劑亞鉛石灰液等も登場し來りし からず。 爾來歳を經た 然るに時局は銅の節約を要求するこ あ 5 農用藥劑に使用せら み信ぜられをり ること十有九 くもあらず、 止むなき狀態 クツ し硫黄 その

用に努む 劑は石灰ボ 吾國に於て最も普遍的且つ大量に用 れば銅の節約上多大の貢獻あるべきは言 n F ゥ 液なな 50 從つて本劑の經濟的 らる

林

ボルドウ液の濃度稀薄化に就て

堆敷を調査せ

(工)薄荷銹病豫防試驗

堆敷を調査して効力の優劣を比較せり。

	撒	量斗	量斗	量半	等三 量斗 區太	のル
-	五四一七〇	0	0	○・三五	0	武第一殿厄
	二三・九五	〇 <u>·</u> 五	0	0	〇 · 五	武策驗回
	三九・三二五	0.0七五	0	0. 一七五	0.0七五	平均
	00.00	0:=	0	五 ○ · 五	0.=	指數

に刈取りて各區の生草量を秤量し、又五十莖の葉につき夏胞子月十九日まで四囘各種濃度のボルドウ液を撒布し、十一月上旬B 圃 場試 驗 昭和二年の三番薄荷に、八月二十三日より十

撒	等六 量式 區式	量斗	量斗	量斗	のル
三五・二九	九·六〇	八・七五	0 1 1 - 11 0	八・七七	數夏一 腹一 整平 地 均
一五五、〇三六	二五二、七九七	二四四、〇五五	二一二、三五九	二〇五、九五五	生草量量
100	ニセ	五	=======================================	二五	子夏指推胞
	*				

六 五三 七

本試驗には極端なる稀薄液を用ひざりしも、植本試驗には極端なる稀薄液を用ひざりしも、植生の動につきては未だ試驗の機を得ざるなり。の點につきては未だ試驗の機を得ざるなり。の點につきては未だ試驗の機を得ざるなり。の點につきては未だ試驗の機を得ざるなり。の點につきては未だ試驗の機を得ざるなり。の點につきては未だ試驗の機を得ざるなり。

(Ⅱ)蠶豆赤色斑點病豫防試驗

、岡山農試臨時報告第三八報二〇—二六頁、昭和八年)

F. D. HEALD Manual of Plant Diseases. pp. Economic Plants, pp. 25-30, (F.F. STEVENS and J.G. HALL; Diseases 1915

つありと云ふべし。

を以て、彼國に於ては二斗五升式を普通に用以つ

—217.1926)。米國

ガロンは我が二升餘に相當する

驅除法 農作物病蟲害防除綱要(二〇頁及一〇五—一〇七 三四頁)には二乃至六斗式とあり。村田壽太郎氏の 液の濃度を二乃至四斗とし、大正十年の改訂版(二 一六○頁)には、葡萄・梨・苹果・胡瓜等の病害は二 三十六年に發行されし同博士の農作物病學 植物病害講話二五三—二六六頁、大正五年)。明治 式 することありと記 乃至三斗式ボルドウ液、 IE 太郎博士の提唱にかくり、 6-4-22 より翻案されしものなり 吾國に於ける現行の 布を奬めあり。ト藏梅之丞氏の作物病害豫防 には五斗乃至一石式溫石灰ボルド (九六一一〇七頁大正元年) し、又胡瓜及茄子には六斗式溫 ボ 菜豆の炭疸病には四斗式 ルドウ液 米國農務省最初の の調合量は、 にはボルドウ ・ウ液 (堀正太郎 一四四 を使用 方 九

> 第に稀薄化しつくあるなり。 石灰ボルドウ液 は昭和時代に を使用するに至りたるが如く、六斗式等の稀薄液 ボ よれば大正の中頃迄は殆んど總ての n 以上要するにボ ドウ液を用 入りて實際に用ひられたるが如 U, の撒布を指示せり。 ルドウ液の濃度は、 大正の終り頃より普通四 病害に三斗式 各國共に次 記 「斗式 憶に

三、稀薄ボルドウ液の効力試験成績

農務局、昭和三年)當時の試驗成績によれば六匁 暗示せるものと云ふべし。それ故に筆者は機會あ は後者の五分の一に過ぎざるな せり。然るに兩者の硫酸銅含量を比較せば、 によりては四斗式ボ 式銅石鹼液も効果可なり顯著にして、 當せしことあり る毎に稀薄ボルドウ液の効果につき試験せり、 の濃度も今少しく稀薄ならしめても可なるべきを 兩液が効力に大差を生ぜざることは、ボルドウ液 筆者は農林省の委託により大正十年以降六ヶ年 銅石鹼液とボルドウ液との効力比較試驗を擔 (病菌害蟲彙報第二〇號、 ルドウ液と略々伯仲の効を奏 6 斯る懸隔ある 病害の種類 、農林省

林

去 12

F

濃度稀薄化に就

灰八

灰六灰四

石一灰一灰八灰六灰四 灰石二倍 石二倍 倍斗 液ボ 그부 그박 での濃度 倍式倍式倍式倍式 布 區式區石 區石 區石 區石 ○,四 〇・三六 九昭· 年和 · + = 六、四 0. 1 一一昭 年和 四。五 七昭 • ① 五 〇.六二三 0.四三 四二 平均 Æ.

せりつ が期と垂穂期とに撒布、 は神力にして各濃度 穗 頸 不稱熱病 昭和 火のボル 發病率は各區五十乃至百株につき調 九年より ドウ液は石灰量三倍として製し、 五 ケ 年間 武武驗 也 100 供試品

液ボ のル 倍式 倍式 倍式 濃ド 區石 區石 度ウ 區石 七一流九 べる地 ☆%九昭 号 年和 年和 0-英八 0.40 只%牛同 穗 一生 稻 年 熱 一年-八七 病 發 十同 病 二十二十四 --÷% ·共 率 三 % 平均 本人の人 四十二八 指

> 無 石一 布倍斗 五區五

75.

病

數

病 斗 から あるを知 が如し。 B 右 又は八斗式に 0 斗式にて略 成 績に るべ \$2 々四斗 て差支 石 式は稍 稻熱病に於ては へなか 式叉は 々其 る 斗 0 し。 効果薄弱 式 と同 穗頸稻 實用 等 な 0 効 熱

V)柿 **落葉病豫防試驗** 圓 星性落葉病及角

とし にて を行 和四 分 號、 밂 な 種 ウ その (年) 3 尠 T 者 液 昭 匁)を稱揚せ 四 は最初 か ボ 和 72 0 目 る 四 らざるを この濃度の 乃至五斗式溫 稀薄化 n 人卷第 F 的 年)、安全に 17 柿 ゥ * 液 を圖 達 八 號、 斗 知)も(岡 一性落 得 調 6 乃 6 ボ 合量 石灰 至 J 昭 ることを慥 w (農業及 農試 F が 和 て且 為今日 を知 ゥ 石 ボ 病 六年)。その 液に 式 一つ本 臨 w 0 溫 6 園 時 F 豫 報第 8 ·病豫防 防 まで試験 藝第四 ては薬害を蒙 ウ 石 h 液 得 が 用 灰 後 72 * ボ (生石 [卷第 圃 n 更 6 0 w 場試 報、 F 劾 F." (農業 力充 ウ ゥ ボ 液

昭和六年に行へる試驗にして、鉢植とせる蠶豆の草丈二○糎に達せし頃(二月上中旬)、各濃度のボルドゥ液を撒布しその全く乾燥せし頃を見計らびて Botrytis Fabac IKATA の分生胞子懸垂液を撒布し、直ちに一五乃至二○度(C)の溫度を保持する濕室内に放置して、七日後各葉に生ぜる病斑する濕室内に放置して、鉢植とせる蠶豆昭和六年に行へる試驗にして、鉢植とせる蠶豆

無撒布區	二石式等量區	一石五斗式等量區	一石式等量區	八斗式等量區	四半大等量區	ボルドウ液の濃度
三五九〇	○ 四六	O·四六	〇.五〇	. 〇•二九	· · · · · · · · · · · · · · · · · · ·	一葉平均病斑數
0.001		=	pg ·	〇 八	〇·四	指數

惜むらくは圃場試験を行はざりき。

(Ⅲ)胡瓜露菌病豫防試驗

旬まで八日内外隔に七囘、各種濃度の等量ポルド年とに試驗を行へり、兩年共五月中旬より六月下當場蔬菜園に栽培せる胡瓜につき昭和六年と十

ウ液を撒布し効果の優劣を比較せり。

昭和六年	撒	量石	等 人 半 五 五 二	量斗	量斗	0	ルド
変の	並	<u>म</u> ्ब	表	名	畫面	六昭年和	顆
戊漬よ、	≖	善	154	VIII .	善简	十昭年和	
	共-0	五五	0-1111	五元	五 海	平均	數
四十又よ	₹′000	展"图10	べ、主要大	中西中	A SE	六昭年和	類
マイプ	二、交金	V. 150	次间10	次(四)第	五、八五	十昭年和	
の効果	时"时图时	丑"八九八	ペース 三大		た。九四三世	平均	重

(Ⅳ)稻熱病豫防試驗

說

林

岩

ルドウ液の濃度稀薄化に就て

せら 布の弊点 封度、八斗式とすれば五 ものとし、 度ぐらゐなるが 更に進んで一 せりと云ふ。 著しく硫酸銅 3 カン ボ 或は 此 n 一石式 の際 F りに之を全部四斗式にて使 如 薄 右に述べ ゥ لح 六斗式に改むれ 3 液 の節約となるな せんん を用 時價 0 輕 たるが 減 カン 百萬封度にて足るなり。 硫 いせら 四四 るに に見積 酸 銅 百萬封度に るべ 至ら は 如きボ 50 ば六百六十七萬 n ば三百 推定 n 用しをる 全く 次に吾國 . ウ液 千萬封 萬

要する試験事項

筆者の試 ぎ得るの 1. 恩影響も除去され、經濟上甚だ有利 灰 前 ウ 液 旣 斗式過石灰液 ボ には達せず、 に述べ を以て F みならず、 **驗範圍にては柿落葉病に對する二石式過** ・ウ、 現行 たるが如 薄荷銹病に八斗式、 の濃厚液と略遜色な 0 他は、 之によりて作物に及ぼす本劑 べく、 他の 數種 病害は 未だ積 0 極的 病害は稀薄ボ 稻熱病に對す なれ き程度に防 に奬勵すべ 験を飲 ども、 ル

> や否 らず Thum.) 3 行ふ必要 或 あ 6 され 圃 に銹病 も炭 叉薄荷にても白星 あ 50 , ば全: 疳 一作物 同數少さ為 病 同樣八斗式 各種 石 式 0 病害につき圃 ボ 60 刻 (Septoria あるや未 更に ゥ 0 柿 確 だ明 Menthae な

異常が 含銅量 試験の 葉病豫防用 はざるべ なれば、 るに筆者試驗 に必要なるべきは誰 次に薄荷 要あ 少 w から つきも ドウ液なれ この點に 液 5 ボ n ず。 は、 は のなれ ドウ液 全く之を度外視 如 硫 何 つきては特に力を注 酸銅 L ば展着劑の ばなり。 となれ も想到すべき事 0 石 の五倍量の ば筆者の 灰の加用量に 叉稀薄 加 て施 用は濃 ボル 試驗 石灰を用 で試 行 項 厚液 せ な ドウ液 つきて せる柿 らり、 B

於て多數 も短期 切望して罷まざるなり。 せざるを以 斯 \$ 間 0 に遂行せんとしても不 如き多種 病害に 1 此 0 2 際 多様の試験を小數 き圃 可成 %多數 場 驗を行 0 可能 賛 を得 は な 0 n るは 人に んことを 各地 T 言を要 か

實用化して差支なし。 き結果を獲得したる業者あり、之等の病害に

四、稀薄ボルドウ液の齎す利益

液を撒布し莖の伸長に及ぼす影響を調査せし成績 悪影響を蒙ることあり、この事實は從來閑却され 事實なり。又胡蘆科植物・蕃椒・薄荷等は莖の伸長 梨・日本梨(晚三吉・今村秋等)・苹果・稻・麥等の葉 撒布時期等によりて藥害を惹起することあり、洋 を示せば次の如し。 を抑制せられ、延ては結果期の遅延となり相當の には枯死部を生じ、柿等の落葉を來たすは周知の 三乃至四斗式の濃厚ボ 筆者が曾て胡瓜及び蕃椒に四斗式ボルドウ 實際の衝に當る者の見遁し得ざる現象な ルドウ液は、作物の種類

瓜(新葉五枚内外に達せし頃より七目隔に五囘撒布)

ドウ液撒布區 (四十五枚平均) 二五三・七五 一八九・一七 五四五號 (五本平均) 五六二-四七

椒(苗床一回移植後千日隔に二回撒布)

四斗式等量ボルドウ液撒布 草丈(五十本平均)

二卷、 瓜哇薯に及ぼす生理的影響に就て、農業及園藝第 められをることなり(青木常盤、 制せられ、葉面積の擴大不良なるは既に一般に認 伸長 し。馬鈴薯もボルドウ液の撒布によりて伸長 とす。而して前記各種の作物を通じボルドウ液の も、無撒布區に比すれば數糎抑制せらるへを普通 **尚薄荷につきては數** 抑制作用は植物の幼時に於て敏感なるが如 昭和二年)。 字的に調 ボルドウ合剤の 査せしこ となき を抑

き胡瓜栽培家の談るところによれば、瓜類の病害 栽培家はボ 豫防に二斗五升又は三斗式を奬勵されし時代に され、ボルドウ液撒布を嫌忌するに至るなり。古 蕃椒及薄荷の如き需果又は需葉作物にては重要視 實際上問題となるが如きてとなかるべきも、胡瓜、 しをりしも、 然雖馬鈴薯の如く地下部を需むる作物にては、 ルドゥ液の露菌病豫防効力は充分認識 その伸長抑制作用を恐れて撒布を躊

說

自家製大豆展着劑の調製法に就て

でも一 般に農家の 有 る る挽

乳の 自 あ が得られ の大豆を入れ 炭、水分含量九·六 場合に學げる事とする。 調製の經過等に就ては便宜上次に述ぶる豆 た。この囘轉は豆乳の場合よりも容易で 同轉せしめ %前 供試 述し ると粒子の微少な大豆 た挽臼 和 を用ひ + 一年度 量

實際的に 事は大豆の水中浸漬時間でこれは何時間後に於て を水中に浸漬し 易に豆乳を作り得るかである。 何なる程度に吸水せしものが挽臼 粒の吸水量は次表の如くであつた。 水量を秤り叉挽臼に 豆乳の製造 大豆粒が水分の飽和狀態に達するや又如 一定溫度の下に於て一定時間でと 豆乳を製造する場合考ふべ より、豆乳を造つてみた。 その爲大豆粒十瓦 口にかけ た場合容 B

浸渍溫度攝氏二〇度

供試品種昭和十三年度白莢、水分含量九·六%)

(瓦)水量 4.4 7.3 8.6 9.5 8 11.7 9 12.0 13.7

供試品種昭和十三年度産秋田、水分含量一一。六%)

(N) 水量	(時間)
1.3	1
2.0	3
4.5.	5
9.3	17
10.2	20
10.5	24
11.9	29

外に 中に この て発 ては 結果から明かな様に大豆は攝氏二〇度の んど飽和に達する。 二時間 內外、 ○度にては二○時 間

タ加 を調 豆乳を造り更に水を加へて九〇〇立方糎(五合)と 立方糎となる様水を小量宛加へつく挽臼にて挽き に一定量宛入れ、 行つた。この結果は次の 〇瓦 一〇瓦の大豆を磨臼にかけ吸水量と合せて一〇 し砒酸鉛液 次に浸漬時間 製し砒酸鉛液中に混入し、徑六・五糎 を小量の水に揉出 に加 九立 用する。大豆粉の場合には大豆粉一 を異にした之等の大豆 五升)、 その沈降の程度を觀察し し九〇〇立方糎とし 如くであつた。 砒酸鉛三七·五瓦(一〇 を用 0 標本 た。 N 同様に 豆 瓶

浸渍溫度攝氏二〇度

秋田縣立農事試驗場技師 田

農事試驗 された。今後大豆展着劑がカゼイン石灰の代用と これに基く各試驗場の試驗成績及び昆蟲第一卷第 二號に發表された尾上技師 て充分利 て利用される事は であ 大豆展着劑を農家に調製使用せし 、場長 る であ かが一 が 大豆展着 より る。 る事は昭 つの 各府縣農事試驗場長宛の 々實地指導の場合如 卽 何等の疑 一劑が 問題であ カゼイ 和 十三年八 の研究等に の無い處と思考され り叉この様な相談 石灰 月 何に より明 0 むるのを 代用とし 日農林省 かに 1 、 調

使 市贩 自家製品を使用せしむる場合は如何なる方 用を農家に獎勵せ を使用せし しむべきか。 むべきか 或

る故挽臼の有無は問題ではない様である。

この試

相當使用され普通に所有

してゐるものと考へられ

が、 あ

挽臼

を調製するには必ず挽臼を必要とする

利用

0

る。

故指導上の必要から行つ 深重精密なる研究の結果でなけれ 究を基とし大豆展着劑の自家調製法に ねであらうけれど農家の使用を目前 の試驗を行ってみたのである。勿論 以 E 一の二點である。この點に關し尾上技師の研 により調製せし もの た次第であ が容易で失敗がな ば結論 に控 る。 カコ \る問題は 關 が得られ

きかは自家製品が容易 つて定ると思はれる。 先づ自家製品に 自家製品は大豆粉或は豆乳の よるべ で立派に出 きか 或 なは市 來るや否やによ 版品 によるべ

あ 得 可能である。然し四 二〇度)大豆を水中に浸漬 る。 るの は大豆粉であつて挽臼の 趣きがある樣に思 乳を造る場 には少 3 AL 水中に浸漬し から 720 ともこ 轉は最も容易 っでなけ れば不 攝氏



が多くなつた場合これを粉或は豆乳とするに要す あつた大豆より 大豆を粉にするに 大豆粉 人力で調製す 或は豆 乳調製に要する時 豆乳を造るにも約十分内外 る場合には疲勞する故 も又一〇タの 水中に漬 間 は 大豆 力で 十夕 の量 あっ して

自家製大豆展着劑の調製法に就て

あらう。
あらう。

次の注意が必要と思はれた。
この試驗の結果大豆粉或は豆乳を調製する

720 大體一粒宛入れて挽臼三囘轉位が適當の樣 すること。然らざれば微細な粉末が得ら いが一粒三 大豆粉の場合 前述した樣に三粒五囘轉位でも出來ね 一回轉 0 方が 挽臼に入れ ょ る粒 は小 ń な で あっ はな So

合は成可く緩慢に行つた方がよい。 三、大豆粉末を粗布に包んで水中に揉み出す場二、挽臼の囘轉は速かでない方がよい。

間位 樣に一○瓦の大豆の場合には吸水量と合せて一 は大豆の吸水量によって増減すべきで、 用するの ○立方糎となる位の 豆乳の場合 である。 0 時 は がよい様であつた。特に浸漬時 水を加 挽臼 る量が少ないと豆乳の 水を小量宛加へつ 0 囘 轉作業中 水を添加 し磨臼を使 前 間が三時 調 述 る

結論

秋田		卢炭~			の沈/
間	二時間後	六時間後	二時間後		度 / 上方弹
± ;	-	速.		*	分大豆
·	-	in Apr	1	間三	活信
		-	,	間と	
		±	<u>+</u>	時二間四	二中
		±,	±	時間	引時
} -	 -	+ .	4	(三0瓦)	カゼイ
		+	土	粉	大市豆販

(+)士の場合よりや1多く沈降を認むる場合(二)は殊んど沈降を認めざる場合(土)多少沈降を認むる場合

大豆粉及豆乳調製の經過は次の如くであつた

行つた方が結果は良好である。

韓も困難でない。但し挽臼に入れる粒數は少數宛は比較的粒子の微小なる粉末が得られ、挽臼の囘は比較的粒子の微小なる粉末が得られ、挽臼の囘一大豆粉及豆乳調製の經過は次の如くであつた。

(二)大豆に水を添加しつ、挽臼にて豆乳の調製である。

の場合と殆んど同樣にて結果不良。(三)一時間水中に浸漬した大豆よりの調製

前

の場合と同樣であるが回轉稍容易である。(四)二時間水中に浸漬した大豆よりの調製

(五)三時間水中に浸漬した大豆よりの調製 前、(五)三時間水中に浸漬した大豆よりの調製 前、(五)三時間水中に浸漬した様な意味で一○瓦に對源型可能である。但しこの場合挽臼の同轉作業中調製可能である。但しこの場合挽臼の同轉作業中に受債した大豆よりの調製 前

難である。

(二)六時間、二四時間、四八時間水中に浸漬した大豆をの場合に於ても回轉は大豆粉の場合よりも幾分困時間浸漬するのは避けるべきだと思はれる。何れの場合に於ても回轉は大豆粉の場合を放この樣に長の場合に於ても回轉は大豆粉の場合と放この時間、四八時間水中に浸渍した大豆を

、 漫濱溫度攝氏一〇度

以上の結果大豆粉及び豆乳の製造中容易に造り良、浸漬時間六時間の物は二○度の場合の三時間良、浸漬時間六時間の物は二○度の場合の三時間

說

農藥に關する最近特許

ステルゴム

五分

但遠麻子油 フ ア " チ スを作るには次の様にすれ 五分

度 ばよい、即蓖麻子 フ ス 二時間保てば樹脂酸の 一〇一一五を加 テ ても宜しい。 アクチスを得る。 ル又はダンマルの混合物一〇〇に對しグリセリ 一五分を徐々に加 (攝氏)に達せしめ一時間位で黄褐色の ルゴムを得る。 次に へて攝氏二〇〇一三〇〇度にて 又鹽化硫黄の代りに硫黄を用 エステルゴムといふの へ攪拌加熱しつく六○一八○ グリセ 分に對し リル 工 ステル即ちエ 鹽化硫黃 は 粘液狀 = 1

は軟化流動する事が無 此 の防蟲塗料は攝氏一五 V: 1 五〇度の間に 圖

特許第一二八〇〇九號 殺蟲劑製造 田

即ち棉實油一八立を攝氏三〇度に加温し が参考の爲に大要を説明する。 此 發明は農用といふよりも寧ろ家庭用であ 之に除蟲菊粉末二、二五 る

> ならば濾過すればよい。 瓦を入れ有効成分を棉寳油中に抽出し 後之にバラヂクロールベ オール七五〇五を加へ冷後階酸アミル 〇・五立加へる。必要

特許第一二八二二八號 方法」——日本農藥株式 會社 土壤用殺蟲殺

粉狀として土壌の殺菌に使用する事も普通の が乳化する様に硫酸 ある。此の發明では兩者を溶解する性質あ 使用せられ コールを用ひ透明均一狀態に保たせ 尚本劑を水中に投じた時よくクロールビ 刀 ロールピクリン乳劑は土壌の害蟲防除に通 てゐる。 又水銀化合物を水溶液又は 化油 カ リ鹽を加 た る。 てもの クリン るア である 事で

實施例としてその處方をあげると

昇汞又はギメチル水銀 硫酸化蓖麻子油カリ鹽 九五%アルコール 四九分 四九分

用ひ得る。 尚水銀鹽として他のアル (但處方の順に混合するがよい)

コール可溶性

のもの

B

クロールピクリン

一四分

故大豆暖着劑を獎勵する場合は自家製品を主とす 家は容易に充 きで又自家製品が使用できる様指導すべきだと へられた。 或 分使用できるものを造 は大豆粉は石製の 挽臼 る さへあ 事 が 出出 n ば農 一來る

消石灰を加 はその時の都合でよいだらう。 もこの點殆んど同様で 一、豆乳と大豆 へておいても一晝夜位しか使用期間が 粉は調製の難易は多少はあ あ るから何れを用ふべきか 然し豆乳は調製後 つて

場で大豆粉を造る事も人手さへあれば困難 場合大豆粉に不足を來し 包んで水中に揉出すのがよいと思はれた。 利と思はれる。 定 な いだらう。 の數日前大豆粉を造 様な地 0 7 方では大豆粉或は市販品 であるから、 \$ ても仲々豫定通 この様な地方では薬劑撒 雨天が多く薬劑撒布 0 7 た様な時には、 t り實行する事が困難な V て撒布する時粗布に でを使 足用す 直に其の 布 3 ではな 尚其の 豫定日 0 日を豫 か

農 す ろ 最 近 特 、同一十四年二月十五日まで 、昭和十三年十二月十六日より

浩

利用 團法 特許第一二七七三五號 此の發明は不乾性油 た粘着塗料で主とし 人理化學研究所 から製造 て蠅取 粘着性防蟲塗料 ĩ 紙 72 、ファ 用、 果樹 カ チ 幹部 ス * 財

布用其他粘着力を以て蟲を防ぎ又は捕

へるに用

蓖麻子油プアクチス 亞麻仁油 エステルゴム 果樹幹部塗布用としては 取 紙用とし ボイル油 ての處方例をあげれば 五〇分

說

林

農薬に關する最近特許

を最適とする)分離する事なき優秀の劑である。 なるべく水分含量少ないニコチン含量は七五%する)と無水の沸點華氏四○○―七○○度の炭化する)と無水の沸點華氏四○○―七○○度の炭化する)と無水の沸點華氏四○○―七○○度の炭化する)と無水の沸點華氏四○○―七○○度の炭化する)と成る毒劑である。

米特許第二一二〇六六四號

殺蟲劑

大の様な構造を有に関するものを用ひる事に関する後明である に関する發明である を結合するも可 本と結合するも可

ŃН

он

の様にすればよい。本化合物の製法次

て約一時間半處理する。中に於て五分の醋酸曹達にて一五〇—一八〇度に中に於て五分の醋酸曹達にて一五〇—一八〇度に即1・クロール、2・4 デニトロベンツ*ール五分

冷後四○分の水を加へ沈澱物を濾別し之を水洗し氷醋に溶解し炭にて脱色清澄ならしめる―此所に粉一・九分の目的物を得る。

淡橙色の結晶で融點一八三—一八五度

2・4・デニトロ(5・(α・ナフチルアミノ)・フェノール同様の方法にて火の諸化合物をも得られる。

2・4 デニトロ、6・(4 メチル・α・ナフチル・アミノ)・フェイチニトロ、6・(4 メチル・α・ナフチル・アミノ)・フェノール

2・4 ヂニトロ(5(・3クロール・β・ナフチルアミノ)・フェノール 等

墺特許第一O四一O三號 殺菌劑」

紙、皮革、魚類、肉類にも單に貯藏の目的に使用煙草、ホップ其他植物の繊維の保存に用ひる。又等の如き菌類の殺滅劑で果物、種子、球根類、穀物、エ、アルテルナリア、フザリウム、ステムフィリウムアスペルギルス、ベニチリウム、クラドスポリウ

昭和十三年實用新案出願公告第一九二〇五號 昆蟲採集用餌壺 一内山文六

260

昆蟲類を誘致し捕獲する壺である。 -漏斗狀の蓋を有する壺で此の中に果汁、 農用とは關係はないが殺蟲といふ事で幾分か参考になると 思ふ 腐肉、糖蜜等を入れて

昭和十三年實用新案出願公告第一九四三〇號 驅蟲劑 上下田

ではない織物保護用として簞笥の中に入れて家庭で 用ひるもので パラヂクロールベンツオールを硝子管中に熔着したもので 農用

昭和十四年實用新案出願公告第三四號 押歴棒と餌針を有する鼠取器で土鼠取器として利用し得る。 鼠取器」 一高部千太郎

昭和十四年實用新案出願公告第一九七號 電燈蟲捕カバー」

するの ルロイド製のものであつて誘蛾燈の構造と思想 に於て相類似

「昭和十四年實用新案出願公告第三一四號 昆蟲の捕獲にも用ひ得る故紹介だけして置く。 蠅取銃」 --木村元次

昭和十四年實用新案出願公告第四〇〇號 燻蒸幕の一部分に關する改良考案である。 佛强装置」——尾藤喜平治 燻蒸幕に於ける鳩目

昭和十四年實用新案出願公告第四七四號

之は燻蒸幕と共に使用する地上に敷く防濕紙で之を用ひる 事に 紙」—尾藤喜平治

> 果がある。 より地面よりの水蒸氣で燻蒸瓦斯の密度の稀薄になるのを 防ぐ効

昭和十四年實用新案出願公告第一〇〇八號 萬次 集殺蛾燈」—近藤

遂に間隙より水盤に落ち込み死すのである。 し加熱せられたる金屬製中央飯に突當り硝子製漏斗狀部に、落下し 此の燈口に點火して田畑义は庭園に置けば火光に 蝦其他が飛來

平治 昭和十四年實用新案出願公告第一一九一號

防濕紙を以て造つ、たものである。

昭和十四年實用新案出願公告第一二八六號 動物驅除器」一小

針を利用したもので農用驅獣に使用し得る。

外國特許抄錄 (但十三年十一月三十日より十四年十二)

佛特許第八二八七一三號 病蟲害保護劑

属よりなる複鹽である。 亞鉛、 撒布用殺蟲殺菌劑である。 ナトリウ 銅、 バリウム、アルミニウム、マグネシウ 4 カリウム及アン 成分は砒素及弗素と モニウム等の金

佛特許第八二七五一八號 蝸牛類の殺滅劑

オキ 小麥糠の如き誘引劑と○•四 シメチレン又はメタアルデヒドとの混合物 ―〇・五%位の 1y t

掲ぐれば下の如し。

昭和十三年麥類病害發生狀況

麥赤	病麥	麥蘭	麥黑	麥黃	麥赤	麥	麥菱	大麥斑	麥堅	麥裸翠	小麥	麥腥	病	
黴	褐色雪	核	銹	銹	銹	銹	縮	葉	黑穗病	黑穗	黑穗	黑穗	害名	
病	腐	病	病	病	病	病	病	病	抦	病	病	病		
一天、三大・	·五、〇二九・七	1六、0六六-五	四、0九六-七	[四"三九四。五	五、次六、五	次、0空-二	至"04时~%		至三	1	声"0044米	八八九五十七	面發) / 積生 }	小小麥
七	章	Ħ	24	四	<u>==</u>	プロ	韭	Ì.	ž	. }		17.99 %	废害	
三岩、造六十二	1	100、光法-0	10、四五六-五	一、金一人	一一一、用四四。山	四、二元-六	一一四个三	** ** #03, 11#	谷八- 三	14、10%~1		1.	面發 社 程被 社	大麥及果
 3u	草	129	24	≅.	0	300.		Ť.	=	1291	1	1 %	、度害!	麥
——三类"三大学三	かの当・二	一天之二主	一一一一一一一一一	一一次三点	一元、三0・七	——元、三三、	五、五、五、五、五、五、五、五、五、五、五、五、五、五、五、五、五、五、五、	- HOW . HE	一一"四八0·五	- 14,10K+1	一一点、00年	八九五七七	其他面養生	· ·
主人	-11 112	2006. 1759	11 11	H H	三三	八八八	ナレ	بار ال ا	歌	129	-		程被人	Ŧ

病 病 第·图/第一0·2 川。国门田。川 一、五宝元 八三六・九 0-01 10-0° 10.0 意式-是 1-0 三九四-0 四 一三七七・0 五七、00八・八 四、当天、九 0-11115.1 一、五二五-九 M11-0 世七一〇

小麥增産としての病害の防除

地方に 病 大の増收を得ることは容易にして、 以降北海道•東北•北陸及東山•山陰•山 するや年久しかりしが、農林省に於ては 、費助 の防除を奬勵するため、 余輩の年來の主張にして、病害を防除すれば多 成として年々五 して積雪外しきに亘る地方に於ける麥菌 0 增産上病害防除の最も重要事項なること —七萬圓 藥劑撒布用噴霧器 を支出 之が實 し之が防 昭 0 和 現 を期 間 + 0 年 核 部

林

時

「蜀井下等ででは、「これでは、「蜀井下等ででは、「これでは、「のではないのでは、」では、「のいないない」では、「のいないないない。」では、「のいないないないない。」では、「のいないないないないない。

油乳劑(但中性の乳化劑を用ひること)に關するス根及除蟲菊花の燈油による抽出物、叉はその水の根及除蟲菊花の燈油による抽出物、叉はその水「獨特許第六六五二一六號 殺蟲劑」

ものである。

とド キサノンやチ キサヒド 但溶解剤としては環狀 12 ナフ D 尽 丰 y ク シ H T オ ルの クタ タノ ケ 如き水素化芳香族炭化 上下口 ン)とテトラ又はデカ・ ŀ (例 ラニナントレン、 へば レチク

水素等の混合物を用ひる。

時局下に於ける小麥の病害防除に就て

農林省農務局、卜藏梅之丞

積雪の爲め菌核病を誘發して頗る慘狀を呈し、同 ・ 本見んか多大の減收を來たすこと尠なからず、今 を見んか多大の減收を來たすこと尠なからず、今 を見んか多大の減收を來たすこと尠なからず、今 を見んか多大の減收を來たすこと尠なからず、今 としては品種の改良・栽培法の改善・病害 よの防除等は其の主なるものなり。

の如き全國的に赤黴病の大發生あり、東北地方に 十石の減收、又昭和十一年の栽培面積は前年に比 し五一○一町歩増加せしに不拘收穫高は四十九萬 二千石餘の減收にして、反當收量は前年に比し大 窓にありては五斗九斗二合、裸麥は三斗七升一合、 一下歩増加せしに不拘收穫高は四十九萬 二千石餘の減收にして、反當收量は前年に比し大 次にありては五斗九斗二合、裸麥は三斗七升一合、 本文は三斗九升三合の減收なりき。又昭和十三年 小麥は三斗九升三合の減收なりき。又昭和十三年 小麥は三斗九升三合の減收なりき。又昭和十三年 小麥は三斗九升三合の減收なりき。又昭和十三年 小麥は三斗九升三合の減收なりき。又昭和十三年 小麥は三斗九升三合の減收なりき。又昭和十三年 小麥は三斗九升三合の減收なりき。又昭和十三年 小麥は三斗九升三合の減收なりき。又昭和十三年 說

時局下に於ける小麥の病害防除に就て

昭和 は一般に普及せんとしつくあり。 るくに至り、 以上は何れも成績顯著なりしを以て、 七年來小麥增殖計畫により獎勵金を交付せら 麥類の病害豫防としての薬剤の撒布 農林省は

願する試験を行はしめたり⁰

小麥銹病白澁病及赤黴病防除要項

施肥に注意すること

3 に發病多し、 肥料中窒素のみ多量に施すか或は多肥すれば特 小麥の白澁病と肥料との關係試驗成績 今試験の成績を掲ぐれば下の如し

山縣立農事試驗場成績(平方年)

-					
素三倍量	肥料半量區	肥料三倍量區	肥料二倍量區	標準肥料區	試驗別
ケケ	一六-五(一ヶ年	一八七·四	一三八,五	二九。四	一葉平均病斑數
)	. ;	三四四・五	三五三・五	一升重量
		1.		五五五五五	千粒重量

小麥赤銹病と肥料との關係試驗成績 甲 愛媛縣立農事試驗場成績

> 普通肥料窒素二倍量區 釜 無 用 157

Z 岡山縣立農事試驗場成績

驗 别 黄銹病 發病程度 黑銹病

窒素二倍量區 標準肥 料區

播種期に注意すること

窒素三倍量區

结

、石灰硫黄合劑のボーメ氏比重○・四—○・五度 早ければ黄銹病遅ければ黑銹病の發生多し。 液を左の時期に撒布すること。

撒布の標準

第三囘撒布 第一囘撒布 第二囘撒布 第一囘撒布より一週間乃至十日位を經たる頃 出穗初頃(白澁病及赤黴病豫防) 第二回撒布より一週間乃至十日位を經たる頃 (穗揃二、三日後)

(銹病及赤黴病藥防)

、糊熟頃

防除上の注意

損を防止し小麥の增産を期することしなれり。 七町歩に對し十五萬圓を支出し、以て極力之が減 農林省は小麥の銹病及白澁病防除藥劑費反當一圓 撒布の習慣少なくして汎く防除の目的を達成する 費を助成し增産に努めたりと雖も一般農家は藥劑 三臺に達せり。又小麥獎勵特殊事業として小麥の 器購入費は こと困難なるの實情にあるを以て、 を獎勵し、最近昭和十一年度にては道府縣の 0 参考のため防除に

關係ある

事項を

掲ぐれば 1 3 白澁病及菌核病防除用噴霧器及藥劑の購 一二一、二五二圓、購入臺數七、三一 を被害甚だしき 地方四萬千六百六十 來年度に於て 噴霧

麥類病害防除の沿革

下の如し。

四年度農事試驗場事務功程)なりしを以て、將來麥類白造病及銹病 重○・四一〇・五度液の撒布を行ひしに効果頗る 顯著(大正二年--を撒布することにより相當効果あるべく且つ廉價 なるにより經濟 大正二年西ケ原農事試驗場の開場にて之等の譲防に 石灰硫黃合劑 のボーメ氏比 を撒布することにより相當効果あるべく且つ廉價 なるにより經濟 大正二年西ケ原農事試驗場の開場にて之等の譲防に就ては余は を機布することにより相當効果あるべく且つ廉價 なるにより經濟 を機所及防

又麥類菌核病像防に就ては、余は明治四十三年三月本病調査の 以降福島縣立農事試驗場を指定して補助金を交付し本病の 防除に 試験の設計を指示し菌核病防除試験の施行を促すと 共に昭和二年 を提供せり。 仍て農林省は關係地方農事試驗場に防でも でウ液・石灰硫黃合劑又は銅石鹼液等の如き藥劑撒布の効果顯著な るの成績を發表せり。 又大正十四年長野縣立農事試驗場に於でも での成績を發表せり。 又大正十四年長野縣立農事試驗場に於でも での成績を發表せり。 又大正十四年長野縣立農事試驗場に於でも での成績を發表せり。 又大正十四年長野縣立農事試驗場に於でも での成績を發表せり。 と大正十四年長野縣立農事試験場に於でも でした。 大正十二年に至り岩手縣 なるものは菌核病像防に就ては、余は明治四十三年三月本病調査の 以降福島縣立農事試験場を指示し菌核病防除試験の施行を促すと 共に昭和二年 以降福島縣立農事試験場を指示し菌核病防除試験の施行を促すと 共に昭和二年

當 牧 量量

備

一圓の場合

濃度○•四度液反當撒布量一石五斗原液

石灰硫黄合劑撒布に要する

一回撒布量原液一・五

同上價格

同上價格

三囘撒布量原液四。五

☆ おい 量 が 量 が 量 が 量 が 量 が 量

三、三六九

無撒布區 不成硫黃合劑 二、四二六

小麥赤黴病豫防試驗成績

農林省指定千葉縣立農事試驗場成績

黄合劑○・五度一週間を經で

布

一、四〇八

-E% 二石〇四七

發病步合 反當收 量

液撒布灰硫

〇、六三九

(昭和七・十の二ヶ年平均)

一圓の場合 同撒布量原液一・八

濃度〇·五度液反當撒布量

石五斗原液 九〇錢 三〇錢

斗

同上價格 同上價格

三囘撒布量原液五·四 一一〇八錢 三六錢

以上は相當藥劑の騰貴を豫想して計算せるものな 反當藥劑費は相當節約することを得可し。 るも藥劑の原料を共同購入して共同調劑を行へば

東京帝國大學農學部 明 日 山 文

小麥銹病の小麥收量其他に及ぼす影響に關する綜說

267

黄銹病感染の小麥生育、 收量に及ぼす影響も亦

る明治三十六年の被害も主として黄銹病(註)に因

顯著なものがある。本邦の銹病發生史上特筆さる

小麥銹病の小麥收量其他に及ぼす影響に關する綜說

林

三五

布すれば効果最も顯著なりとす。 を計らんとせば多肥栽培を行ひ石灰硫黄 特に藥劑の撒布 肥料を多量に 施 を充分に行ふを要す。 た 3 もの 或は厚播せる 合劑を撒 殊に増産 もの は

小麥銹病及白澁病防除成績

當業者の實施成績

區 イ 昭和八・九・十の三ヶ年間九ヶ所の指導地に於ける成績 别 千葉縣立農事試驗場指導地に於ける成績 反當收量 る増收量 **用**反當 動費 動

劑 樹 板 硫 黄 合

二十二六六 一八八八

〇・三八

五

一九六

三 五 五 五 五

郁

區

102 山縣に於ける成績

B 除せるものは平均反當收量は二石四 0 升重量重く品質良好に 和八年縣下六一八町二反歩に對し に比し 割乃至二 割の増收を學げ得 して隣接の無防除 九 實施し防 ーにて 12 b 0

香川縣に於ける成績

和九年二十四ヶ町村三 七町歩に對 し防除

> を行ひ隣接せる無防除 斗餘の増收を擧げ得た 0 60 B 0 に比し反當平均

福井縣に於ける 成

= 防除地に 昭和九年縣下五九町七に防除を行ひ隣接の無 比し 反當平均一一二割の

増收を擧げ

防除試驗成績

得た

60

イ 農林省指定愛媛縣立農事試驗場試驗 (銹病及白澁病防除二ヶ年平均 成績

三十二三九 二十七九〇 〇三四 九

反

當 收

卷

U 岡山 縣立農事試驗場試驗成績

病(生銹 斑一程病 數稈度の 営 八二 三十七八八八 反當收量 〇七三 る増收量

別

撒灰多 布硫肥 區黃 合 衛石 同無撒布區

五五一

銹病及白滥病防除

三・〇五二

撒东普通 灰菇黄层 有 一种 石

二十六五二 〇・三八一

三四四

查 調査個體數は各區 0 結果を要約すれば第一一 表の通 である。

第 一一表 黄銹病菌接種區に於ける小麥收量及其構成 要素各項の標準區に對する増減(%

始接 時 期 開 (罹病性 生銹疫 重總量量實 增總 福惠 穗 减粒 粒鬼白

幼 幼 穗 Garnet 薬 抵抗性 べつ 八〇 八〇 八五 上五 = 二三一八 五九。一 六五。 · 1 <u>рч</u> (一)三四。五 (+) (+) =:0 (十)三二・六 (+)111-4 (十)一〇·九 (半)三一・七 (一)二、五·九 (\pm)) pq 五二 四四。八 11 1 . 4 四三四 三九・ 四〇八八 三八・七 五 八、四 二一。六 九十六 m - 11

三〇であった。 九〇 瓦當粒数を示せば Chogat では〇%、 五一·Garnet では〇% 標準區に於ける發生程度、 三三·六瓦、 總子實重量、 四七二五瓦 四六本、二三・〇 總穗數、 H. 粒穗

ち之に見る通 5 黄 0 影響は、 小麥生 長 初

小麥銹病の小麥收量其他に及ぼす影響に關する綜說

響の 滅 準區 品種 萎縮 區にては低下を見る て標準區 5 な の子實減收は も重要なのは 穗粒 であ %に及 す 加に由 で激減 存す 種 と殆ど差異を示さな 0 敷の る。 は温 から るものである。 より増加 んで居る。 るを看過出 に於て最 す 低 斯 度 それで るが 下が兩品 る減收を構成する要素を分析するに 0 關係 穂粒數の減少と思は 一六五%、 す 3 \$ る。 8 穗 來 抵抗 顯著で、 7 孕期接 初期感 種共著し 性品 概觀す 抵抗 粒も亦罹病性 V 感染期 種區 種 粒大の減少 性品種 種 染 抵抗性品種で四 0 · · · 0 n 接 で減 ば之等要素 小 穗數 0 種 か 接種 牧の 病 0 副 0 る。 ノは子 では た爲 性 品 では 罹 著 種 猶影 實 は標 接種 種 中 反 病 0 Ŕ 0

する割合は第 L を示し、 た區 末より六月中旬に百 DUCOMET氏(は發生程度四五 收量其他 一二表に掲げ 九二七) 0 項目 で、 6 0 ソ 記 0 標準 無撒 1 述 る通りであつた。 す ダ 布區 ボ る處に IV 微撒 F には 機れ 布區 ウ液 を撒 ば、 八五 17 布 四

n

註、三橋氏(一九三一、一九三七)は右の破

收穫物を檢するに屑粒が過半にも上つてゐた。 地種物を檢するに屑粒が過半にも上つてゐた。 で調査がある筈で、何れ發表される事と思ふが、 の調査がある筈で、何れ發表される事と思ふが、 の調査がある筈で、何れ發表される事と思ふが、 の調査がある筈で、何れ發表される事と思ふが、 の調査がある筈で、何れ發表される事と思ふが、 の調査がある筈で、何れ發表される事と思ふが、

一子實收量に及ぼす影響

Presona氏(二九二二)は黄銹病の影響を交配種のF。 大で調べ、Rudore & Job 氏(二九三四)は無病時に 大で調べ、Rudore & Job 氏(二九三四)は無病時に 大で調べ、Rudore & Job 氏(二九三四)は無病時に 大いで調べ、Rudore & Job 氏(二九三四)は無病時に といいで調べ、Rudore を といいでは、Rudore を といいで

> 度四 量は多少低下した。更にポット植の小麥二品種に 五・六%の減收が見られた。 ben では發病痕跡區に比し發病程度八のものは二 七のものは一一・九%の減收を來し、Heines Kol-就ての實驗結果に據れば、Oregon 種では發病程 四%に達して居る。抵抗性の品種でも接種區の收 品種で四一五で、その子實減收は一一・二十一八・ 二%であつた。次年度に於ける發生程度は罹病性 が、減收は供試三品種につき一三・六、一〇・七、四・ 度の發生程度は最高を八とせる指數で六を示した て隔離せるため其の發病は著しく少かつた。初年 種區との間に燕麥を介在せしめ又は遠距離に設け 月黃銹病菌生態型四の接種を行つた。標準區 平方米、三乃至七品種を供試して二年間、 ―五區に比し發病程度七區は一三・八%、六― 四| には接

程度に達し、抵抗性品種 Garnet は二%を示した。病性品種(Chogat では各區共七五—八五%の發病失々接種を行ひ、二週毎に接種を繰返したが、罹期、三葉期、分蘗期、穗孕期、開花期の各期より期、三葉期、分蘗期、穗孕期、開花期の各期より

料

受ける所と極めてよく類似して居る。
%の増を示した。以上の諸影響は赤銹病に

量は 品 罹 水量 では僅に増 に於て然りであ 性品 種で 種 は總量に於て僅 0 BEVER 氏の 接種區 たっ る。 一は著 單位乾物重に對 調査 しく大で、 か に減 た處 殊に早 す 3 抵抗 期

大部 發芽率は船蟲三七%、 之に關 フ 0 發芽試 治三十六年の n 被害株の子實に屑粒の多い 分は黄銹病の 四 7 £ %であ し堀正太郎博士 七、 驗 を施 德治六五、 つたとい 銹病被害株種子を各地 行せら 被害に歸し得ると思は ふ。恐らく此の發芽不良の n 0 たかが 内山八〇、 プレー四三、 面 白 事を前に V 調査が 夫の結 j. 述べ 才 に果に依 あ 白笑出 より集め る。 れる。 1 たが ス 四六 ると 氏は 7 ŋ

(3) 摘 要

見られ、 於ては早期 を來す。 上述責銹病の影響を總括す 穂孕期 罹病 より 以後 72 發生す 依 3 0 種數 n 發病に於て がば子 實收 る 穗粒數 12 8 量 0 罹 著し 病 粒重 性 割の V 減 何 減 15

> ずるが から 量 8 でも甚 遅延する。 顯著に低 しく減少し 其 の際 下し、 抵抗性品種でも或程度子實收 穗粒 無効分蘖を増 つ草丈、 敷の減 穂長、 少が目 立 桑重量、 20 出穂

意を表する。 資料を貸して下す 稿を終るに當 5 0 種 た堀正・ 々御教 太郎博士 示賜は り且 に深 一つ興 厚 0 八味深 謝

資

紫雲英施用方法と稻熱病との

係試驗

及ぼす影響を檢し は紫雲英の 紫雲英の 施 施用量及施 農林省指定岡 是及施 同 一時に稻の生育狀態を知ら 消用時 川時 期 山 期との が 縣立農事 稻熱病 關係 武融 0 發生に

んとす。

第一二表 黄銹病無防除區の小麥收量其他につき

防除區との比較

 A point of the property of th

② 小麥の生育其他に對する影響

次の如き顯著な變化を認められる。 今 Beven 氏(一九三じ)の實驗成績に就て檢するに、から、被害は當然植物體の發育にも現れて來る。 黄銹病菌の寄生部位は主として葉及葉鞘である

第一三表 黄銹病菌接種區に對する增減比較(%)

開花 (_) ----、 (_) コー (_) パース (_) パース

數の延引何れも罹病性品種と大體同樣な傾向ネ示數の增加、草丈、穗長、根重量の減少、出穗期迄日區で延引する。抵抗性品種 gannet に於ては分蘗

らか、接種後出穗期迄日敷及成熟日敷は早期接種二六%の減を示すのは其の原因何處に在るであら

氏(fiff)の實驗では臺重量は罹病性品種に於て事は興味ある問題であらう。Gassner & Strainすけれども顯著ではない。然し根重量に影響する

重量の低減は當然豫想される所であるが、 上も低かつた。次に穂長の減少も顯著である。豪 實際岡山縣吳妹村で昭和十三年大發生した場合も 開花 (+) 1.0 0 の激減は意想外である。開花期接種區に於てすら セイチコ小麥の罹病植物は健全植物に比し一割以 文は初期感染は二○%以上の低下を來して居る。 を増すが、之は穗を生じない無効分蘗である。草 穗孕 (+)四-0(-)0-四 分蘖(十)四・0(一)水・三 三葉 (十)八·九(一)九·〇(一)九·四(十)五·一(一)六·〇(一)三七·五 即ち罹病性品質(hogat について見るに分蘖數 0 (一)九-0(十)二八(一) 六-六 (十)一三(十)五九(一)四三 0 (+) = 1 (-) -1 根重量

料

標 挿玉當紫雲 英 同 試驗區 秧瓩 秧赶 廿月 供試品種 -----廿月 用前五 用前五 施日 度熱葉 程稻 I, 0.公金 〇・宝 三・八八 二六・六 三・七 八日〇 節點熟 發病 0.0 0.0 마자 1 교 0 전 金 步 ガーゼへ 1気・0 三0・人 八二0 四部熟 0.0 0-1六 二八-六 三五-0 八二0 治 一品人一一八八四 重量 一年三三二二六六 三元九三十七八三五 云光 三一八七 米賣量 岩上 三十六 容量 取壹玄 量立米 八七 今。四 지-六 全·四 ペニ・ニ ^\· ∆<u>|</u>•0 八四% 步籾 合摺 五。。三七 步屑 4-0 读言 七三 三五-五 五。三三六八 *·0 =1-1 五九 三三九 收當壹 量藁阿 摘 は各區 を飲ぐ 要 秧瓩 廿日

1.

元二 宝七

八四。四

六。四 三九·九

の・善 宝玉 三・六 公六

八三・七

パー九 三五一九

二八九 三〇-五 三十二八公

三五八

八三-七

水•0 图1•5 六二 灵主

○・四二 ○・四二 二九・五 三六・五

八五

〇-六1 〇-九九 二八-五

三温-六

期早さも して施用したるものは、 にして旺盛なる生育を遂ぐる を觀るに、 稲の 上共最 出穂前に至れば施用量少さも 傾向を認め 生育 は葉色次第に淡緑を呈するに至 紫雲英の施用期早さもの B 旺盛となり 各區 72 50 に於け 殆 大暑以降に 活着遅延し生育 んど其差異を認 る 西 插秧後 挿秧期に接近 至 は活着良好 0 0 生育狀 及 れば生育 CK 0 順調 め難 n 施 6

沓

料

試驗方法 三種 繩にて吊し下げ陰干しとし乾燥後施用せり。 、驗成績 三日前各區灌水す、供用紫雲英は生草を 秧瓩 廿月 日日 廿月 十月 十月 につき紫雲英の施用量及施用時期を異にして施用し插秧 用前五 施日 用前五 施日 用前五 施日 穀良都(抵抗性弱)小腹(抵抗性中)龜治(抵抗性强)の 度熱葉 程稻 H I $\cdot I_3$ \mathbf{I}_3 五十八六 三九九 -一一一一 --% 9± O·八二 四·〇九 二五·八 三二·〇 八三五 0-次 =-20 ==-2 = 2-六 八三0 供試品種 發病步合 一点・声 0% 七・九七 項稻熟 九-四九 二三-九 二九-三 八二〇 パ・九 二四·四 三〇·〇 八三〇 三三六 量€ 岩・0 量・三 八七 그룹·스 프 스크 스크 三五九 三一六 重量量 三五-二三〇-九 米壹 穀良都 元立 量當玄 容量 二九二二 八二七 公共五 重壹玄量 立米 一旦秤量し後之れを 八三十五 **公**· 公式 八三。九 **≙**% 步籾 合摺 步屑 *-1 中国 ハーセ 1 **35.** % 老一〇年一 X-1 M7-0 四半 ニカー六 云光 # 1 · 1 試驗區 供試品種 秧瓩 秧瓩 秧瓩 # # 用前五 施日 用前五施月 用前五 施日 11 废熱葉 程稻 C 150 0-三一% 八。四四 0-0 節稱熱 主 〇-一五 三-六四 二四-二 二九-六 0-1五三-九二三-四二八-八八三0 0-1六 三- 究 二二- 二 元三 八三 發病 腹 有和熱 でき 二十九八 二二十五 二六十三 八三三 三一天一一八四八七 步合 五-0九 三四-六 三〇-三 八一七 四十二 二十五 二六-五 で空 二二元四六二二 米壹阿當玄 重量 高头 B·1 合豆 一八・七 二三・三 八〇九 容量 公元五 重壹玄量立米 八。四 八 六 金头 40 **公**--4 今% ○ 步极 合摺 <u>八-</u>

八二

1:-O:1

七・三三二・七 六十二 三五十三 六·三

玉-四玉|-五

A·三 三·0

九-五 三三-九

驗知せ 0) 生育 本 んとす は紫雲英施 稻 發 如 る影響 あ から ġ.

試驗方法 1 秤量貯藏ひる挿秧五 (小腹) 紫雲英の 抵抗性强 施用量を異 (龜治) 前施用 の三品 . 同 時に 九抗性 種を用 石灰加 易 (微良都 紫雲 用 五 抵抗性

供試品種 穀良

度熱葉 發病 四 智熱 步 重量 米壹阿當 容量 重壹玄量立米 步籾合摺 步府 合米 收當壹 量藁阿

 I_2 二。第 四。八七 三天主 三三八七 八六% 1751 1751 % 三肚

用灰五〇紫 二日・雲 、前○英

五同〇上

ル 石 灰

施

--ハー北六 4-1 ₹: 三至·0 三·0 八二 三人人二 全人 光-0 10-11 **区** 170 一三十七

用 石灰六○○ 氏六○○ 丘施 二-- 次 二 二 四 三十九 公乳 全主 الا ---· · · · · ·

12 宝九 景六 於二 **△** 라-인 교육-의

○同同 用灰肥成五紫 庇 三料分・雲 ・に量 英

一六空

-: 回・ ()

二九七

ハーも

灰肥成五紫雲 三料分・ごを料量に ○ でを ・ にてを ・ にてを ・ にを ・ にも ・ 1 五 五 灰

六-0七 二二-0五 二八-二 三四四

公·主

七四四

形 施石上 加灰 8

量主

A: A: A: A

10-11

○·○ ・ ○ ・ の ・ の に 加 用 Ŧî. 13 11001 四十七

 I_3 さき 宝宝 110-1% - E OBU 0-41

00E

八金

公--

三三头

八〇・二 八二・九

九・三 三九・九 7°=

五·〇瓩施用紫雲英阿當二

供試品種 小 腹

二・二五瓩施用
五日前施し石灰
・○瓩を挿秧 試驗區 度熱葉 程稻 節稻熟

發病步合 **門和熱**

重量 米壹阿當安

重壹玄量立米 步籾 合摺 步屑 合米

收當壹 量藁阿

○.% ☆ ₹% Ξ 吴燕 **三**土 八八五 △% 亡% 玉 □ 電班

0-1% 小皇 一天一回 三天 **企业** 八四十二 八五 三七-0

四同

· E 五〇同

七二五二 三六.主 三元 八0% 4-0 六七七

○
丘本・○
丘布石灰三・○
の近を挿秧
・○ 六・〇〇瓩施用 石灰 灰 I_1 長・六

0.11

九-四八

宝人

E

40·4

ハーも

4-4

四

料

然共施 に於ては斯る現象は益々顯著となるに至れ 關係に て旺盛なる生育を遂げ施用期の早晩 より生育狀態に明なる相違を來し出穗後 用期遅きもの施用量多きものは依然とし 記と施 用量の 50

イ)葉稻熱病 せざらさ。 にありては施用期早晩と發病との關係は判然 施用するもの發病程度高さを示せ共小腹龜治 都に於て顯著にして龜治小腹には少し。 するに從つて發病程度低し。 施用期に 加するに從つて發病程度高く、 ありては穀良都は挿秧期に接近して 葉稻熱病は紫雲英の施用量を増 此の傾向は穀良 施用量を減

れ共、 用するもの最も少く、 穀良都は施用量を増加するに從以 りては、 し施用時期に 穀良都と同一の傾向 各區の發病率は何れも一%内外にし 小腹に ありては、 紫雲英の施用量に就 ありては發病極め 十日前 挿秧期に接近 に施用す 發病を増加 て觀るに、 龜治にあ て僅少 るもの

> ハ)節稻熱病 用時期と發病とに何等の關係をも認め難し。 治小腹にありては、發病極めて少く施用量施 二十日前に施用するもの、發病最も少く、 て判然たる成績を認め難し。 穀良都にありては、

各區を通じ

收

不足に基因するものの如し。 るは少量の紫雲英を早期に施用する場合は肥料 二十日前施用區は却つて收量を減じ前者と反對 の結果を示せり。 ありては三品種共十日前施用區の收量最も多く に從つて收量增加を示せり。阿當一、五〇〇區に 近以上を施用する場合は例外なく施用時期早さ 加す。次に施用時期に就て觀るに阿當二、二五〇 各品種を通じ施用量を増加するに伴ひ收量を増 施用量により斯る結果を來せ

紫雲英施用量及石灰施用量と 稻熱病との關係試験

農林省指定岡山縣立農事試驗場

()節稻熱病

穀良都は殆ど穂首稲熱病

傾向

を有

すれ

共、

小腹龜治は發病極

8 と同

7

小

石灰との關係は判然せず。

せるものと加用せざるも 發病程度極めて低く成績判然せず。 發病程度高し、 ものとを比較すれば、 を示さざる)葉稻熱病 B 穀良都にありては、 小腹及龜治にあ 石灰 加 何れ 用量少なきものと多き とは、 も加用量多さもの りては各區 石灰を加 病 に差異

口)頸稻熱病 然共石灰の加用量を増加せば、紫雲英施用區 用し、石灰を加用すれば大に發病を輕減せ に於ては却つて發病を増加し。 病を増加するもの 共大體に於て石灰を加用すれば頸稻熱病の 用區にありては發病を減少せり、 ては各區發病率は一%以内に ては石灰加用の効果を認め難く、 以上の如く品種により其傾向 穀良都にありては、紫雲英を施 \ 如 し して成績明なら 無機質肥料施 小腹に 龜治にあり を異にすれ あ 60

農家の栽培法と比較 病防除に有効と認めたる事項を綜合して他方 んとす。 本試驗 は當場既往に於け 農林省指定岡 稻熱病被害輕減 る試驗成績 山縣立農 の度を知ら に基き稻熱 般

試驗方法 又綜合取扱區は苗代本田に適宜藥劑撒布を行ひ、 液に三時間浸し下種するも、在來取扱區は種子消毒を行はず の二品種を用ひ綜合取扱區は級種子を「フォルマリン」二% |間遲延せしめ挿秧期は在來取扱區に比し三日早く行ひ元肥 四日間早く施用せり。 本試験は光明錦 (羅病性品種)龜治(耐病性品種)

奔 致 石 灰 、	實粕	肥料名	古什然服雪
		745	

本田施肥量 灰 阿當施肥量 三十八八〇 五·七八〇 三一四一〇 成分含有量 - 七九五 •六八五 一〇五

過燐酸石灰 肥料名 豆 六-四三 肥 肥 九·四 五

四五

0-119

門九

一一一

10°-2

九三

四同主

) 旺施石

0

1:14.

七六二三六 元六

大人

100

元-0

#-0=

五三七一六

八四・七

**

上九九 三六九

八五

公···

4

五十二元二五十九 五十三 八〇七

おかべ

元・五

I2

0.元 元光 高。二

八四・四

五二三七九

施石成五紫 用灰分・雲

 I_2

0 · F.

一八七

*

玉二

四六

○·○ ・ ○ 近 施 用

 \mathbf{I}_1 I_1

大・空 三金・八 三・0

八七

六・〇〇瓩施品 同上 同石

石灰

0.0

三0.0 景九

40

八四。四

福·汽口 点次-五

II. IIII.

五・〇瓩施用紫雲英阿當二二

Ø[1.00 0.

宝人三二

八七七 八・七 八十五

供試品種

治 でまっ

I

100・三 三七二 八三

七-一 三九-五

草

丈長 外 あ

莖敷亦多さを示せ

60

發

病

四·五〇瓩施用 石灰

0. E

元一 三六八七

五二灵人

な 加 比

60

今是 3

を草

丈莖數に就

て觀 2

るに多少

3

n 3

加

加用量

少

3

より多さも

と生育狀態は石灰加

用 0

量

多さ

旺盛 4

 \mathbf{I}_1

0%

元莊

美立

公英斯

兰%

* %

元班

L 各品

活着良好に

して其後

生長旺

50 生育

石灰

驗

度熱葉 程稻

節稱熱 發病步合

阿粉熱

重量

容量

米登斯量當

重壹玄

步翔 光曆

合米

摘

要

稲の

插秧後

0

活着及生育狀態を

種 を通 生育

じ無機質

紀料

有機質 盛な もの

肥

料

品 觀 五・〇旺施用 五・〇旺施川紫雲英阿當二二

> L II I_2

0 三 0 三 0

○大七 三〇・五 三七・九 八〇九

八四・七 今。

**

八。四

三四。九

平。四 七三

料

ノ出 香

料

除法を講じたるものは講ぜざるものに比し收量 りては其差少し。 著しき差異を生じたるも、抵抗性强き龜治にあ

水稻品種の耐病性並に其の特性 と肥料配合量試験

に稻の生育に如何なる影響あるやを驗せんとす。 の配合量を異にし栽培せし場合、稻熱病の發病並 試驗方法 本試験は罹病性及耐病性品種につき肥料三要素 灰、加里成分は硫酸加里を以て施せり。 瓦を施用し、窒素成分硫酸アンモニャ、燐酸成分は過燐酸石 料は壹阿當窒素成分五六七瓦、燐酸成分及加里成分各三七八 選び、三要素の配合量を異にして栽培せり。本試験の標準肥 早生、中生、晩生の罹病性及耐病性品種各一品種を 農林省指定岡山縣立農事試驗場

愛國新庄七號 供試品種の抵抗性及成熟期を記せば次の如し。 號 都 早中晩の別 稻熱病抵抗性の强弱 强

步屑 合米

≖-″ =0・二

本-0三1-4

標	同	同	同	二室倍素	同	同	同	同	同	肥普 料通	試		2.6.
準		同憐酸	里	燐 酸	無釜	無加	無鱗	窒素二	加里	燐酸	駿 區 別	供	崩
區	四倍	加里	二倍	倍	主素	里	酸	一倍	二倍	一倍		武品	
0	I_1	I_1	1,	I_1	0		I_1				度熱葉程稻	種	力
0-0	0.0	±.	3# · 0	0.0	0.0	0.*1	0-듯	0-岩丸	0.0	0%	節科 發 病	愛衂	晚
- - - -	二。四第	一-	二・盐	0-4四	0-0	<u>-</u> =	0-公宝	二-三年	0.公园	0.%	西和 か 合	新庄上	生
元。四	三十	-0 -0	三十	壹人	= -	六。四	11-0m	다 부	六六	元 上班	重 米壹 牧阿	號	
一点。	天 -並	章-六	壳	三九五	主	三	量二	픗-	兲-0	壹☆	容量		
	至	至	全	全	八元	八五九	40	至	₹0	公元瓦	重壹玄量立米		弱
八 四 - 〇	<0-0	共主	₹0·0	^ <u>-</u>	大-九	A0-X	金.0	会•○	二头	八四九%	步籾 合摺		

同		肥普料通		試
窒素	加里二倍	燐酸		験 區 別
倍	倍	倍		
Π_3^{ζ}	I_3	I_3		熱葉 程稻
要	一·宝	0.%	節稱熱	發病
六・児	170	- % Fig. %	部和熟	步合
=======================================	云六	元	重量	米壹
10-4	=======================================	声 主	容量	量當玄
金	八五九	全瓜	重量	壹玄
스	だ 上	兰%	步合	籾摺
A.	36. 29	七%	步合	屑米
E0-11	壳 .	壳	收量	當臺

供試品種

穀良都

至一三。

六八 三四十六 七-0 景-0 ベス 美・0 五-五三六・〇

六七 三三 H-1 11-0 七一三三 四五三六

四七

沓

少肥 少肥 多肥 龜治 0 I_2 I_1 0-110 0.八三二次四0.三 三一六三九九 三·四 E ... 七盆 八二八 五十三 四十一 八十六 三二年 哭头 公上 老人 宣言 四人 一- 二 壁头

多肥

10.88

究-二七

二六・宝

盖 花0 长九 だ四 岩型

收

量

多肥

 I_1

1-11 量-0 是-1

III

八七三 五七二 四三 八十三

一六六

179

口)頸稻熱病

)節稻熱病

葉稻熱病と同 葉稻熱病と同

の傾向を示せり

の傾向

を示せり

たー 七%

錦光明

 I_1

O.**

一 云 三 六

八%

□ □ □ 四九十六

度熱葉 程稻

發病步合

層稻熟

重量 米受量玄

重壹玄量立米

步屑 合米

收當壹 量藁阿

木 試驗成結 回 囘 數 灰 八月 七月廿 七月十一日 六月 六月十九日 撒布月日 撒布月日 代 pq 五 九 H Ħ 綜合取扱區のみ施行 期 六・八〇 六斗式過石灰 十匁式銅石鹼液 十匁式銅 石鹼液 ボルドウ液

30

熱病發生激甚となり、

育を不良なら を阻害され、

しめ、

生育旺盛期に至

りては葉

大に生長を阻害せられた

挿秧後に於ける活着並に其後

0

來取扱區は稻熱病發生

げたりの

て苗代期及本田を通じて常に旺盛なる生育を遂

綜合取扱區は稻熱病の發病極めて輕微にし

イ)葉稻熱病 株を生じたり。 病全區に及び著しき被害を蒙り點々出穗不能 爲め發病極め し發病少し。 て輕微 綜合取扱區は防除方法を講ぜし 而して兩者共少肥は多肥に比 なりしが在來取扱區は發

少きを示せり。 量遙に多 在來取扱區と綜合取扱區とを比較すれば後者收 兩者少肥と多肥とは多肥區 抵抗性弱き光明錦にあ りては防 收量

四六

摘

更

稻 0 肥

-- 9 三0-九 天-九

資

料

標 二燐 倍酸加里 燐酸二倍 窒素? 加里二倍 四倍 表 里 區 11 12 13 Π_{I} I_3 II O·i 0-20 0-13 0.0 三七元-0 0-完一元十三两人 1・四四 0・次 中四・1 一一元 三八四。 -- 三 三 三 0 班中一四五一〇 元主 三六一 宝九 八五八三十六 公天 全·0 □·四 四·六 八0元 八0元 八五八四三 八五 八四。七 今三 今·九 10·六 豐·二 八二八四。宝 公正。二 八五。四 品·一二人 表土 七二

供試品種 丽印 力

同 同 肥普 料通 試驗區別 **燐酸二倍** 燐酸二倍 無 無 無 加里二倍 窒 加 雌 蒸 里 酚 IIII H III_1 Π_2 IIL 0. 張 一。六元 節稍熱 質稻熱 發病步合 一七·一九 二四·○ 二九·九 八三·一 八○·○ 11·○ 四○·三 三十三七二三十〇三〇十八八三十二二三十八三十八三十八 七三四三六0 三八七六 公一一一一四十0 二- 英二七-三二四-五八0-四八0-八 10-三四一-四 111-1110-0 重量 玄景 容量 容量 重壹玄量立米 犬六 三·兰 步**极** 合摺 步屑合米 四年

> 摘要 だ 稲は他国 後の活着並に初期の成育良好なるも無窒素區 するも葉色濃緑に過ぎ穂揃極めて不良なりき。 毛良好にして、 最盛期に於ては抵抗性品種は發病程度低き爲立 の爲著しく生育を阻害され、葉稻熱病の發生甚 加 しき區の水稻は出穂期に至り幾分生育を恢復 里二倍 稻の 四倍 區に比 區 生育 二十一三 一四十九 五五二三 三一八八00四八二十三 一四十二 四十八 一・天 し著しく不良なりき。 窒素多用區の 各品種を通じ窒素多用區は挿秧 三-10 三十九 三十七 七十六八0九 二十二 四十八 一二-九五 二四-五 三一-〇 八〇-四 八二-九 一七-六 四四-六 五十一五 二五十九 三〇十八 七七十六 八〇十一 八十二 三九十六 罹病性品種 葉稻熱病の は 發病

發 病

(イ)葉稻熱病 口)頸稻熱病 多少に不拘發病多し。 最も少なく、 罹病性品種についてみれば無窒素區 窒素用量多き場合は燐酸 抵抗性品種の發病は概し 品加里の て少な

發病少なく、 窒素用量多き場合は燐酸加里の 葉稻熱病の場合と同様無窒素區

i.

八二元

三九

資

驗區 窒素二 燐酸一 加里二倍 加里二 別 py 里 度熱葉 程稻 I I_3 I I_1 I_1 I_2 II I_2 0.0 0.1 0.% 發病步合 0-美 D·四、三·八 ED·八 八三·七 八二·四 ○・四九 三四・六 四一・二 0.0 本-1年 中1・0 三三十六 111-11 三七七 **=** 至 重 米壹 收阿 二九・五 1H-K 111-0 100 三九九 - 天·0 三七九 三九。七 八四十三 八四・八 **全** 重壹玄量立米 八門 八門八 스--公上七 八四十六 **≙**% 步屑合米 179 ** 金金 玉六 た・ 九二 四九 174 % 1751 五一六 五二十六 = -四一六 9 五0.0 四 三 1 哭。 175

潍

區

 I_2

0.公

11.0回 二四十二元。四

全 共入 10·1 图·1

供試品種

日ノ

一倍素 無 加里二倍 供試品種 四倍 區 I₃ III₂ III_3 九一二六 九。三五 八二六 〇・九四 九·三八三二·〇四 二九·九 二六·五 ・シュ 龜治 11年-00 望・公 己・□ 量・1 宝二七 三八 元二 五二五 本の元 元・ 高・二 五。四九 五宝。九 三三 元头 二年二二元六六 草・西・西・西 #0·* 公二 公元 슬 益 八宝九 八五九 0.0 七九・二 北北一五 だ·三 10-10 图-1 門。四門。 1-00 中。中 九-九 三九-六 玉七 七九九 四:

同

標 試驗區 **燐酸** 燐酸二 加 加 準 一倍酸加里 、里二倍 索一 里二 供試品 里 废熱葉 程稻 V_1 I_1 I_3 0.公园 0•<u>*</u>% 0.九0 0.至 0.0 0.0 一·当 一三元 -美聽選 發病步合 八九 一九・会 一九四 0.公 三十四 プ・01 · . ---三-天 二宝-四 一二0-九 ハハ・七 九光 三至。0三0-4 河北 1八-0 11-2 八-0 二十七 元·五三五·三八四·三 重量 米売阿當 -#· 二九九 三0.九 | | | | 元-三 容量 全 公品 슬 八〇四 A0四 公司 とここを 量・ 当主 --当-九 70·E 龙-玉 三% 步籾 合摺 大大 三·0 盖·i 全

10-m

七七七

R. %

里山

美四 七九

三七

八十三 四三十二 产 步屑 合米

收當壹 量羹阿

同 肥普料通 試驗區 加里 酸 倍 废熱薬 程稻 I_2 0% 步合 三十七 重量 米臺 牧阿 常 三九十六 重壹玄量立米 八七%

74 1

११५१ रेघ

四六

沓

殆ど發病を認めざりき。 る顯著にして特に耐病性品種黄玉一號區に於ては其他の委託試驗地に於て試驗せり。其の成績は頗明かにせんとし、矢作町試驗地竝に八名郡八名村

四、耐病性品種育成試驗

成績 は 12 特に黄玉×日ノ丸系統の にて栽培し發病・生育・收量等につき調査せる 三〇系統、 玉旭等は發病少なきを示し、別にF。黄玉×日ノ丸 た 種 50 豆郡一 るが、 岡・佐賀・長崎・熊本・宮崎・鹿兒島等にして、其の 神奈川•靜岡•岐阜•滋賀•京都•岡山•徳島•愛媛 は大體縣内栽培の成績と一致せり。 他府縣農事試驗場に比較栽培を依賴 に於て育成又は選拔せる本病耐病性 色町等にて委託栽培し發病狀態を調査し 試驗地 就中黃玉一號、全勝 F。黄玉×早生旭一二系統を矢作試驗地 の外丹羽郡犬山町、八名郡八名村 ものは良好なる成績を得 一七號、 同二六號、黃 밆 たる に、

の耐病性・收量・適否等を比較調査せるに、高農三け(十一縣二〇品種)之を矢作試驗地に栽培し夫等又他府縣に於ける耐病性品種の種子の分譲を受

應せざるものへ如し。 も草丈長く且つ晩生にして、本縣地方の栽培に適五號(鹿兒島)神關三號(愛媛)等は耐病性を示せる

石苞蟲藥劑驅除試驗

於て五〇%、收量に於て反當約三斗增收し得たり。 被害水田に對し八月十四 も松脂展着劑加用) 1(除蟲菊劑)、 る結果、 稻苞虫 一の被害特に顯著なりし幡豆 トミノー二〇〇倍効果最も高く殺蟲率に 力 愛知縣立農事試驗場(端和十二年度 ンコウ殺蟲劑 の三種の薬劑につき試験し 日硫 酸 _ (デリス劑)(チン、 郡横須賀村 トミ 何れ

品種に関する試験 小麥腥黑穗病菌の系統と

鮮系を除き他の一一系菌に使され、 丸腥黑穗 査せるに、 を小麥一二品種に接種 他府縣より取寄せた 病菌にのみ侵され、信濃澁 鴻ノ巢二五號の一は岡 愛知縣立農事試 し夫等の罹病關係を比較調 る小麥腥 驗場(昭和十二年度 黑穗病菌 Щ 不知 新中長 • 長野及長野 は 一二系統 朝鮮

加

二里二

一倍區、

加里二倍區は著しく發病

穀良都

にてて

量 の多少 に闘せず發病多く、

資

收量 區を通じて一般に收量多く、無窒素區 ては窒素普通用量區は窒素二倍區に比し收量多 しく少なし、 の收量の差少なく、窒素普通 ハ)節稻熱病 を増加せり。 見れば頸稻熱病と同 の場合は發病輕微に 無加里區他區に比し多く、 抵抗性品種についてみれば窒素多用區 神力種は窒素普通用量區と窒素多用區と 加里四倍區收量多し。 罹病性品種の穀良都、 節稻熱の發病は穀良都に 傾向 して其差を認め難 用量區にては無燐 あ 窒素多用區にて るも、他の品 |は收量著 美穂選に ついて の各

愛知縣立農事試驗場(昭和十二年度

續せるもの 人の如 12 昭和元年以降農林省指定試驗とし て、 本年度施行の主なる試驗事項 て機

> く前年の調査同様本病の傳染發病が順次下葉より 病步合を調査したるに、株につき九月二日各分蘗 上葉に及ぶことを示せ 本 つき九月二日各分蘗莖上の葉の位 田 初 葉の 期に於て浸水し感染發病し 位置と初期發病に關する調査 下葉に至るに從ひ發病多 た んる現地 置 に依 る罹

せるものを各種狀態の本田に移植し、 仕立方を異にし或は發病地苗に諸種の藥劑を撒布 にし併せて其の防除實施の効果を知るため、苗 前年に繼續し生育初期に於ける本病感染を明か 二、初期傳染豫防に關する試驗

ウ液の撒布も二次的傳染防除上効果あるを示せり は藥劑撒布苗に被害少なく、 もあれど概して無被害地 其成績は試驗地により顯著に現はれざりしもの 三、苗代及本田に於ける綜合防除試驗 よりの轉地苗、 本田に於けるボ 乾田苗叉 ルド

ける綜合防除の効果を比較試驗せり。

半に本田に於て藥劑を撒布

し、苗代及本田に於

且つ之等の

布竝に耐病性品種選擇等による綜合防除の効果を 項に關聯し苗代及本田を通じ育苗法、 成

t

5

礼

る 耕

耐 種

病

性品種と認

むべきも

0

* 縣

밂 5

品

として栽植調

査す

小麥萎縮 交換栽培に關する試験 病に對する耐 病性品

は石灰及堆肥

0

驗を要すべ

からも

のなり。

0

如きも

源白

粉

發芽に害

あ 6

之を防

V

.

ク

TJ

12

E° 力 毒に り

乳

州等は

有効

は

昭和十二年

る

有無並 性とし 17 本 耐 て、 病 7 認め 性の程度等を比較試験し之が優 は 大分縣立農事試 九州各縣及高 谷 らるし品種につ 府縣農事 温 驗 驗 知縣に於て萎縮 場の き地 業昭 連絡調 称十 方的變 報二 査に 告度 良

0

17 係

耐

病

る

目 3

的

なる品 0

種を得

んとす

るにあ

50

設計

法は本場標準とし

協定

よ

送付

西 國 穗

揃

1.00×11

用に依るを可とするが如きも ぐ為に な る * フ 畿內一 白 新 江 早 一號熊本小麥 小 五八號 麥 鹿兒島 30·0 ₹0·0 益-0 垂・0 些。

五.

箵

料

沓

五二

生性最も强く何れの品種にても發病を認めた にても發病し、 穗揃·江島一號·伊賀筑後 岡山系菌及長野丸腥黑穂病菌は寄 ・赤坊主等は何れの菌系 60

裸麥斑葉病豫防に關する試驗

麥斑葉病に對し現時實施しついある風呂 大分縣立農事試驗場(昭和十二年度

湯浸法よりも一層簡易有効なる防除法を案出せん

目

的

とするにあり。

硫酸銅液、 設計 種子を水洗せるものをフォ 昇汞水、 品種大分稞 木灰汁等に浸漬して播種す。 區面積五坪) n ~ ŋ ン液、

フオルマリン一五。	冷水温湯浸法	風呂湯浸法	病菌附着種子水洗	試驗區別		,
3	上	Ŀ	E	良生		1, 1, 11
)	· ()	Ö	五五五	九昭年和	發	A
)	0	0	11110	十同年	病	
Э,	0	0	1110	十同一年	少数	
•	0	0	1 111 43	十同二年		

,16、標準(無病種子)	15、標準(病菌附着)	14、同三〇時間浸	13、木灰汁(熱湯二升)	12、二〇〇〇倍同 同	11、一五〇〇倍同 同	〇倍 同 同	汞水一	同工時間浸
£	上	Ŀ	E	Ŀ	£	142	1-1:3	中
			ere de service		رمند			
0	四三八	ļ,	八,	-1		Q.	0	0 /
0	五	0	0 1	-5	1	Ò	0	0
	1101		. 1					
,O		0	0	0	0	0	0	0
=======================================	二三八		0		0	0	0	Q

響なく本病豫防上効果あるものは風呂湯浸法 三〇時間處理のもの等なりき。 水溫湯浸法•一五〇〇倍昇汞水一〇分間浸•木灰汁 以上四 ケ年の試驗成績に據れば、 麥の生育に影 冷冷

小麥立枯病土壤消毒試驗

愛知縣立農事試驗場(昭和十二年度

現地に於て、 之等の結果に據れば、供試品種に依り相當差違を 及石灰窒素の施用法等に關する試験を施行せり。 場内十分の一坪の蓮甕及豊橋小麥原種圃の被害 各種藥劑に依る土壌消毒並に漂白粉

6 5

一、〇〇倍液同 三〇〇倍液同

中

時間浸

間浸硫酸銅液三時

3

2

資

料

被害業を數回摘探しボルドウ液を撒布せず。

尚本年は 試験を行へ 外サ ド各二〇〇 倍液 撒布區

供試樹數 一區五本

樂液 ボル ドウ 斗 液は硫酸銅 に付カゼイ 一二〇タ生石灰八〇 石灰五匁加

成 精

ŋ 22 前年 水 F 極 及サ 3 樣 7 术 小 n 12 沐 數 F イド撒布區も極めて良好なりき 0 ゥ 液 發病果を認 を撒布 せ る do 72 B る 0 は効 に過ぎず。 果顯著

夏蜜柑潰瘍病豫防試驗

縣立農事試 驗 場(昭和十二年 報度

成績 复蜜柑 0 潰瘍病の 適當なる豫防法を求 Ū

ド石五ウ灰斗液ボ式ル Kin 驗別 六月十五日)2回 無 藥劑撒布 撒 布 葉供 数試 0.4 率發病 蓝 並 -數果病 た。当 生病黑 發點 15

> 六月十五日, 0-4

> > 芸

ولار

銅石名 鹼式 ーークポイン 外スインド 六月十五日

00M

六月十五日 添加 世り 0.4

> 岩 益

M-11

中

六・七

中

" 各樹共藥害を認めず。 ポイドは魚油石鹼を

調

查

一方法

發病調査は各試驗區

共三本に付平均

的 き果實二五、桑一○○枚に付調査す。 に發生せると認めらる箇所を選び各樹に

蜜柑 効果に闘する試験 瘡痂病豫防と新殺菌劑の

蜜柑 F ・ウ液 瘡痂 大分縣立農 を撒 病豫防 布 E 之が豫防上の効果を檢 サ 事 試 w 水 驗 場 1 (器和十二 F 7 報一 ポイ 告废 1."

知せんとするに 設計 1 サ ル 术 ィ あ ド二〇〇倍液 60 (水一斗)二回撒布

王銅

ボ

Ħ

的

2 3 ~ 主銅 米 1 同

標準 (無撒布)

五 H.

五四四

も强さは新中長、真坊主にして、福岡小麥、白ブリ上三ヶ年の調査成績に據れば、本病に對し最好智能後 同 へ0 200 0 100·0 至0 200 A

小麥穀實線蟲病に關する試験

ブ等之に亞ぐ。

愛知縣立農事試驗場(業務功程)

一、小麥品種の穀實線蟲に對する

九號等なり。

九號等なり。

九號等なり。

九號等なり。

九號等なり。

二、防除に關する試験

本病の發病を防止し得たるは、病原混入鶏糞を充るが故に之が處理法につき試驗せり。其の成績中の主たる原因は被害混入の鶏糞施用に依るものな前年度の試驗成績に於て明かなるが如く、發病

せるもの等なりき。 分腐敗せしめしもの、及一月下旬追肥として施用分加水醱酵せしめて施用せるもの、液肥中にて充

率大なる例外を除き一般に發病殆ど認められず。極常時接種せるものには二○度に於て稍發病種は發病狀況を調査せり。其の成績に據れば、播植し發病狀況を調査せり。其の成績に據れば、播植し發病狀況を調査せり。其の成績に據れば、播機常時接種せるものには各溫度共發病甚だしかり、多字後接種のものには子温度より五度の差にて三接種と乗る。其の成績に據れば、播機と、一般に發病殆ど認められず。

溫州蜜柑潰瘍病豫防に關する試験

及囘數等を知らんとするにあり。 日的 蜜柑潰瘍病豫防上ボルドウ液の撒布時期大分縣立農事試驗場(糶務)報告)

設計

3、彼害葉摘採後五斗式ボルドウ液三回撒布(第一區と同時期)2、五斗式ボルドウ液四回撒布(同上の外第四回八月上中旬)二囘六月下旬第三回七月中下旬)

於ても被害粒は發芽歩合低

く發芽後の

生育 内内の

脫出

せるものは全然發芽せず、三頭以

芽及其後の生育狀態等を調査

蠶豆象蟲の被害影響を知るた

8 たるが、

ポットに於て發

四頭以上 ものに

象蟲の被害と發芽並に生育調

月上 菌核 年以上に及ぶてと確實となれり。 より 旬 に其の發生を終りたり。 も多數の子囊盤を發生し 其の 昭和九年產 生存期間三

蠶豆象蟲に關する試験

爱 知 縣立農事試 殿場(端和 務 功 程 和十二年度

防除藥劑試驗

圃 に被害を輕減せず。更に繼續試驗を要す。 等の接觸劑を四月下 日 ŀ 隔 12 場に於て、硫酸 爱 に撒布をなし其の効果を檢討せり。 ノー 象蟲の被害を防ぐ目的を以て産卵喰入時 石鹼液最も効果多か ニコチン、 旬乃至 五 りしも尚實用 デリゲ 中旬 0 ン、トミ 間 其 の結果 日及五 0 期

茶樹 IV ビー蠟蟲驅除の 大分縣立農事試驗場(器和十二年度 ため、 之が孵化期

を檢知せんとするにあり。 1、石灰硫黃合劑○-五度液撒布

に種

4 的 0

藥劑を撒布して其の効果及藥害の

3 2 同 カローギン合劑二〇倍液撒布 二五倍液撒布

5 4 トミノー三〇〇倍液(石鹼二〇匁加用) コクサイト二五倍液撒布

6 標準(無撒布

供試本數 區十五本

成 藥劑撒布 績 第一囘七月十二日 第二囘八月五日

9 ト撒布區 当 も石灰硫黄合劑撒布區は斃死歩合極めて少なか 本年度の成績に據れ 藥害は各區共認めず。尚試驗を重 は効果多く、 ば、 ŀ ミノー 力 T 區 ーデン、 B 相當有効なり ねべし。 = ク / サイ

芍薬の斑葉病驅除豫防試験

奈良縣立農事試驗場(昭和十一年度)

誉

のは石鹼 五タ加用、 他のものにはカゼイン石

布 第一回五月二十八日第二回六月九日 樹齡十五年生

區三—四本

成

區は八八%、クポイド區は二四八%、王銅は二四・ 歩合七・二%にて最も良好なるを示し、ボルドウ液 以上試驗の結果に據れば、サルポ 標準無撒布區は五六%の發病歩合なりき。 イド區は發病

菜種菌核病に關する試験

愛知縣立農事試驗場(略和十二年度)

豫防に闘する試験

○・二%銅石鹼液區、再土寄區等發生少なく、クポ 験せり。 品種六ツ美種につき碧海郡六ツ美村に於て委託試 前年度に準じ藥劑撒布及土寄の効果を知るため ド石鹼液、ボルドウ液等も相當効果を認めたり。 二、品種との關係試驗 其の成績は概して例年と同一傾向にして

場内栽培の菜種六七品種につき菌核病に對する

て、 晚生朝鮮二號一ノ二、細莢六ノ二對米中生等にし らるくものは、近畿一號、遠州黒×支那蘇黄三〇一 抵抗性につき調査とたるが抵抗性稍大なりと認め 病特に大なりき。 ノ五、遠州三號、 近畿五號、 、晚生吉田一、伊勢黑、 農林一號、 同二號、晚生吉田、 吉田等は發

三、栽植距離との關係試験

離と菌核病發生との關係を試驗したるが、六ッ美 號の兩種に於ては距離の狹き程發病頗る多く、伊 種に於ては大差を認めざりしも、伊勢黑、 二・○尺區に對し二倍夫々栽病を増加せり。 比し三倍、近畿二號は二・〇×一・二尺區は二・五× 勢黒種は二・○×一・五尺區は二・五×二・五尺區に 菜種六ッ美、伊勢黑、 、近畿二號等を用ひ栽植距 近畿二

四、菌核病の子嚢盤發生調査

の發生頗る多きを示し、四月下旬に最高に達し五 き子嚢盤の發生狀況を調査したるに、其の發生頗 直ちに蓮甕に埋藏し自然狀態に保ちたるものにつ る早く二月上旬發生を初め三月上旬に於て既に其 前年度に準じ收穫當時罹病株より菌核を採集し

量の 立枯病 るもの ものに對しては石灰ボ 一、二囘撒布 摘要 三囘撒 增 液等清澄なる含銅豫防劑を代用せば可ならん 獥 あるを以 . 菌核病等の豫防 と品質 九月中 十月中旬 十月下旬 四斗式 て本縣主産地に發生 期 旬 調 E 石灰 查株數 を圖 n ドウ液、 をかね五月中旬 ボ 根部收量 るに利 n 三六•五 二九一 三八。八 ١, ゥ == あ 液を撒布して收 12 並 5, 彩 イド銅液、銅 しき銹病・ 增收割合 觀賞用の より十日 二五

雜 銯

熱病 苗稻熱病 農林省指定岡 1-關 に關 する研究成績(第五 Щ する試験成績 縣 立農事試驗場成績 報

務 局

9

稻

四)苗代に於ける薬

要な 最も賢明なる豫防 肥培管理を合理的 撒布に關する諸般の事項を闡明にするは極めて必 ころなり。 發生激甚なるは吾人の 適當なる天候に遭遇せんか、不測にも苗稲熱病の せざる地 するは、 苗代に於ける稲熱病の る事項なり。 方に 努力上よりするも且又經濟上 斯る意義よりするも苗代に於ける藥劑 て不 合理 法なり、 に行ひ耕種的に之が發生を防 幾多の苦き經驗を有すると なる栽培法 發生 然雖耐病性品 は 耐 病性品 会行 U, より 種 種を栽培 を用 す つるも U

階梯として、次の如く降水囘數及撒 果持續期間の長短を知らんとして左の實驗 せる場合に於け ウ液・銅石鹼液・コ 稻熱病豫防劑として使用しつ 其の濃度と殺菌 ボル ドウ液の殺菌力持續期間 3 U 藥 力の イド銅 劑 0 持續期間 流 ۰ 乏量の ブ ラ 1 を験知 あ ス 多 ŀ る石 布囘數を異に

0

四

灰

ボ

す

る 種

0 を N 用

少、

及び效

を行

核病、 より當場指導の下に同村東井上に於て豫防試驗を 布を試み昭和 郡に相當廣 ざるが故に、 し蕭然たる狀を呈し收量にも多大の影響を免れ 銹病の被害夥しく七月になれば全株枯 薬用及觀賞用として磯城・高市・吉野の く栽培せらるく芍薬に毎年斑葉苗、 + 昭和九年度當場內花壇に於て藥劑撒 年以降磯城郡川東村農會の 希望に

十五日、 績 昭 二十二 和十年度場内に於ける驅除豫防試 一區四株供用、 日、 六月六日の四囘に行ひ 藥劑撒布は五月八日、 たり。

本年度收穫調査したり

二五 十 月月 發病步合(%) 三五十月月 十六月月 豫防効果

pcj 液也包式銅石鹼 ○・五度液 ルドウ液 發病步合は明かなる病斑数個あるものを被害薬とし總葉 無 八 かき蕾を付けたる 汚るに豫防、 枯損せるものあり 少し

数に對する割合を算出したり。

五八

發病時 期

五月十五日 薄紫褐色の病斑點々現はれ数日にして病斑胡麻粒と

六月 五月三十月 病斑小豆粒位明瞭となる、 當時開花始

なる

胞子及擔子梗を生ず

六月 六月二十月 + 耳 昭和十、 病斑徑六—八糎、全葉枯死に至るものあり 病斑徑三一五糎となる、 年度磯城郡川東村

に於ける驅除豫防試驗

ヴ液を撒布し各區一樣の管理を行ひ 十一月六日五畦一區一一三株 斗式石灰ボルドウ液を撒布し、 十一月十二日四年生のものを一 宛を收穫調査したり。成績次の如し。 三年生及四年生のものに六月十九日、七月四日、七月十七日、 に昭和十一年五月三十月、六月十日、 に付三唯九三株宛收穫して秤量せり。 供試品種 井上白(イネシロ)一區三畝步を供用し昭和十年度は 三年生のものを其儘とし更 七月十日四斗式石灰ボルド

二、三回撒布 一、二回撒布 甲 昭和十年度四年生を豫防せるもの 十月下旬 十月中旬 枯葉時期 根部收量 三七・〇 白味多く良好 色 澤 增收割合 1 11 1 - 11

無 調查株數各區九三株

豫

防

九月下旬

並

雜

錄

	/ 石二 圣式	一石式り	八斗式	六斗式 ク	スト式ブラ	· • • • • • • • • • • • • • • • • • • •	薬劑の濃度			<i>王</i>	一石式。	半	六斗式り	イ四半式コロ		樂劑の濃度
4 網	11.0		0.	0°±	0 : 個	薬第	道		3	= *		O-12	2.0	O M 個	薬第一	苗
石	10-	へ・六	=	二	- 個	葉第二	田稻熟病平均		ラ	D256	125	===	H-0	0.00	葉第二	稻熱病
論	4	**	ZE	=======================================	。個	薬第三	平均病斑數儘	:	*	35. 35.	æ.	⇒**		〇個	葉 葉 葉 葉 葉四	一均病斑
液	二 社	-	1.0.	0	0金個	薬第四	数儘		ŀ		六		0-4	- B		结
	三	九二三		#-=	三個	數均病斑	莖平					7. 1291	六九	一個	数均积	莖
	≟	<u>-</u>	0.1	0.	0 個	薬第一	EXT 2				্ হথ্য	**	_	0 沈個	棄第	
	<i>9</i> 6	ヘ・三	七六	玉	○個 北	葉第二	稻熟病平			175 175	35. /ч	=	11-0	三個	薬第 	稻熱病巫
	<i>₹</i>	七-二	Æ.	□• 0	二個	葉第三	7年均病斑數 水			A.0	**	±.	**	≟個	薬第三	均病斑路
	Iros Ł	1.0	0.	1.0	. 0個	来录)	数水			三六	=======================================	1-1	ナシュ	0個	来第四	数水水
	—————————————————————————————————————	一七八		= 179	<u>•</u> 個	數均- 病 斑	莖平			i0•±	35£	三六	÷	三個六	数均叛	%病平均病斑數 一莖平 水
	= ==	÷	-	0.1	九個	薬劣	苗			±-	174 36	=======================================	··	○個	薬第	苗
	三之	<u>^</u>	^ <u>-</u>	E. O	四世	楽だ	柏熱病平			巫	Tres	0	===	一個	薬第二	稻熱汽
	=	10-st.	九二二	ाप और	主個	葉第三	稻熱病平均病斑數 一莖平			六・七	五六	1/4	* = = = = = = = = = = = = = = = = = = =	二個	薬第三	平均病斑數
	쿳	二九	- A	0.2	- · · 個	乗第) 四	数降			=	11:0	六		—個	葉第,	数降
	#-0#	==-	110-1		沙個	数均病斑	並平			=======================================	14.4	=======================================	Tt.	# 個	数均病斑	- 莖 水

六

の持續期間

程度を檢せり。 寸に達せる頃四種の藥劑を撒布し、(一)は其儘と 「フレーム」内にて稻熱病菌の人工接種を行ひ發病 (三)は撒布後二囘水を充分に撒布し後各區共に し(二)は撒布後一囘噴霧器によりて水を撒布し、 肥料倍量を施せる「ポット」に栽培せる稻苗の五

、藥劑の調製方法 石灰ボルドウ液……硫酸銅一二〇匁、生石

灰、二四〇 夕、水四斗。

コロイド銅……「コロイド」銅粉末二二五瓦、水一八立に溶解し

石 鹼 液……硫酸銅一〇匁「シスター」石鹼四〇匁を水一斗 に溶解せり。 魚油石鹼三七・五℃を加ふ。

釽

一、調査方法 ブラスト……五〇〇のを水四斗に溶解し四斗式とせり。

数を数へて一葉當り平均病斑数を算出せり。 各區一〇〇個體の稻苗につき第一葉より第五葉迄の各葉の病斑

、實驗成績

1 石 ウ

一石二斗式	一石式	八斗式 ク	斗式	ル四ド十式が	薬剤の濃度	Ī
0.4	0-1	•	0.	0. 三個	薬第	for 1
= (10)	-	=======================================	一,	個	葉第	自稻熱病
124	三六	三 四	=======================================	· 二個	薬第三	平均斑
÷.	123	0 Ju	0.4	000	葉第, 四	数
プレ プレ	八二	せ・0	玉	四 個 五	數均叛	tte
0.4	O-A	0.4	0.*	0個	葉第	苗
四 七	- M	≖	=	一人個	葉第二	稻熟病
六·七	沙里	729 0 729	三七	三之個	薬第三	平均病斑
크	\$ [7.59]	<u>-</u>	1-0	0人個	葉第四	数
0. H	元-三	八九九	玉	☆ 個 五	數均病斑	
1.0	0.	O 四	O. E	0 個	薬第一	苗)
179 0	# 1 ·	□ - <u>□</u>	===	・七個	葉第二	稻熟葉石
五。	· #-0	四六	三六	六個	棄第 三	牛均病斑
芫	1-4	÷	1.0	0個	棄第四	藪(

斑平

2

雜

生程度を比較せり。 ボルドウ」液及び十匁式銅石鹼液を所定囘數撒布し、 稻熱病の發

稻熱病の全病斑數を數へて各葉の 平均病斑數及一莖平均病斑數を かせりの 調査方法 六月下旬各發病中庸なる部分五十本を拔 取

、試驗成績

〇昭和十年度成績

ウボルド 石岭 試驗區別 二囘撒布 二囘撒布 (無撒布) 三囘撒布 一囘撒布 三囘撒布 囘 0.4 〇・九 () 四 =:0 苗稻熱病平均病斑 一。六 · 四 五 一つかか ---0.4 葉第 三 一・六 一,六 • 六 個 0.六 〇-八 O:八 五 薬第 四 · 0: つ・五 **○**: O·四 ○_個葉第 四 数均一 病莖 斑平 六個 四・七 五七 五三 四・〇 九二 ...

〇昭和十一年成績

同ウボ液ル 各 二回撒布 囘撒 六.六個 葉第 二〇個 苗稻熱病平均病斑數 葉第二 O.E 棄第三 0.1 葉第 四 葉第 五 〇個 數均一 病莖 斑平 二三五個 三五

> 同 石鹼液各一囘撒布 二囘撒布 鹼液 同 ども「ボルドウ 難さも銅石鹼液は其の附着極めて佳良なり、 るものならん。 に試験施行 發生を減ぜり。 タ式銅石鹼液は共に撒布囘數の增加は苗稻熱病 前 に比し發病稍大なりき。之が原因 表に示すが如 準(無撒布) 三囘撒布 中の降水は兩年共著しく少きに原因 〇八 」液は銅石鹼液に比し流亡し難きも 元來「ボ 四斗式「ボルドウ」液は 一六-0 11-11 ():六 • 四斗式「ボルドウ ルドウ」液は稻葉に附着し 一三·九 0.1 • ---• = を追究する 」液及び 〇匁銅石 四五・三 然れ ---0

2 各種藥劑の濃度と苗稻熱病 との關係

0

なればなり。

して苗稻熱病防除の效果を比較せる成績は次の ラ ス 石灰 F ボルド 四 種の各種濃度液を調製し苗代に撒布 ウ 液·銅石鹼液·「 = U イ F 銅・「

如

試驗方法 陸苗代に坪當棉實粕二〇〇タ、 過燐酸石灰四〇

苗稻熱病平均病斑 葉第 三

濃度

石

2個

棄第二 其 葉第 四

均病一 斑莖 数平

葉第

苗稻熱病平均病斑數 葉第 0個 葉第 三 葉第 四

數均一 病莖 斑平

三個 0.個

薬第

() 個

八九個

葉第 三

苗稻熱病 平均病斑

稻苗の五寸に伸長せし頃 ŋ

よれ 長きに比 より 持續との は 増加大ならざりき。 ば石 て約 莖に 銅は 濃度を低下するも他の三種の 加 も大なりき。 六個 約二 灰 關係は、 た 旧の降水によりて一莖平均病斑 ボ = 個 る n T 0 12 病斑數を増加 F イ 病 石灰「ボ ゥ F 銅 叉前記藥劑中石灰 |銅・銅石鹼液・ ブラ 液 數を增 石鹼液は 降水囘數と各種 は殺菌的效果の 12 **ا**۔" だせ ゥ 300 」液及 藥劑に比し 巳 以上 0 び 降 水 0 0 n 事 降 數 = F 1 效果 實 水 期 より D

發病を増加するものなるを知 藥劑の撤布回數と發病との關

る。

液撒

布は發病最も

办

なり 四種

之に亞ぎ銅 藥劑中石灰「ボ

石鹼液、「コ

前表に示すが

如

0)

iv

F

ウレ

三種は降水囘數增

5

六。至

藥劑の流乏大に 又濃度の稀釋に

して、 より

效果持續期間著し

3 加

短 17

< ょ 七

六匁式 八匁式

ロイ

銅撒

布

0

順

序に發病多く、ブラス

ト」は

て、「ボ 銅石鹼液は流乏量大に を生ずるは、 より流乏量を異に て兩者を圃場試験に 稻熱病豫防に使用 n F* ウ」液が效果の持續期間長 前實驗結果によりて明か す よりて確か る薬劑が撒 殺菌效果の持續期間 て效果持續 めんとせり。 布後降水 期間 なる きに比 短きを以 所に · 差異 他

たる後麥稈を被覆し、 施肥後三日目に神力種を坪當四合の割に播種し、 試驗方法 硫酸加里三〇匁を基肥に施して普通の如く苗代を作り、 陸苗代に肥料は坪當棉實粕二〇〇匁、過燐酸石 輕く後土を行ひ 四斗式石灰

	標	同	同	同	銅石	同	同	同	同	¬ブラ	同	同	同	同	Гпп	同	同	同	同	「ボルド ド	į,	de:	
維		tict	六	, (鹼液			74	六	ストし	_		7.	六	イド」編			73	六	トウ」液	zp G	変 別 つ 。	
				for.	+	石	7:	SI.	21	51 E.d	石二	75	21	31.	pri			31.	31.	四	ž	農	
Sale	SHo.		タ 式	公 式	タ	斗	41	가	斗式	十	31-	4	-1-	4	과	小	*	7	7	斗式			
er.	Tela	10	II.	II,	34	1	10	Д	14	м,	1	14	11	14	11:	24	24	~	,				
	宝-七	No.	•	量	th-011	1	1	#·0ill	量人	H#-11	1	三六	壹-八	三四-七	宝丸	1	F0-1	高元	三九	吴 - 六糎	丈		
	0.11	1	0.1	0	0	ı	}	0-11	0.1	0.11	1	0	0.1	0-1	O´	-	0	0	0	○ 個 ³	€ —∙第	١ ١	普
	0.1	1	0-1	0	0	1	ı	1.0		_	ı		0.4		0-11	Į,	9	· 0	0	〇個美	走二第	苗稻埶	通
	==	-	0-%	0-13	0.1	-	1	O・回	14.0	0-#	-	O-#	0-11.	0-11	0.11	1	ш•0	1.0	0.1	○個「	青三第	稻熱病平均	肥
			0-:1	0	. 0	1	1	0.11		0-1			0.1		0.1	1	0	0	0	○個美	長四第	玛 斑數	料
	0.11	1	0	0	0	1	1	0.1	0	0	ı	0	0	0	0		0	0	0	〇個2	麦五第)	科
	→ 四	1	0.5	0.11	0	1	1	<u></u>	一.		1	0.北	<u>.</u>	0-*	0-%	ı		0.1	0-1	0個	數病學	下一 匀莖	
			元			量・	四四六			里北		豐六	四六	三九-三					E0-0	100元版		草〉	,
		-																					肥
	.0.1	ž.	0-2	[hel]	0.0	*	0	0	0	0.*	0.九						0· 🖽				裝一第	は、	11/12
	チュス	15.01 0 15.04	-	≟	並	179	*	ZSI ZSI ZSI	六	÷.	元	<u>:</u>	*	=	<u>:</u>	1.0	0,4	-	0-11	九個	 丰二第	稻熟病	料
	三九	三十	=======================================	<u>•</u>	北	主	10-4		走	兴	= *	≓. *	P • 0	=	0.九	0.*	-	=======================================	0.1	七個	集三第	华均	倍
	-	===	O.	0-1		1.01	三九	#£	<u>→</u> £	三	三九	玉	二人	bel =	<u>-</u>	五	*	÷ tu	===	- 6個	美四第	病斑數	量
	1.0	0	0	0	0	0	O - 7t	0.1	0	0	主	一十七	 -×	 -	0.0	=======================================	0	0.1	4.0	0 計画	医五第	/	526.
_1	一天人		1				=	===	ナレ	10-%	三	11.3	六				丑.			三個	斑良數病)
六五			,																				
	l	11.	. 11	11	11	"	h	11	11	11	11	11	11	11	11	11	11	良		稍不良		散薬の腹	
	1	11	"	Ir	なし	1	11	ľ	1)	11	11	11	"	なし	稍有	"	"	"	"	なし	有	変	

匁、硫酸加里三○匁を基肥に施し神力を坪四合の割に播種

部に前年の被害薬を被覆して、苗稲熱病の發生に努め後薬刺撒布 し、上 均病斑數を算出せり。 體に生ぜる全病斑數を數へて各葉に於ける平均病斑數及び 一、調査方法 各區發病中庸なる部分より五十本を拔取り各個

〇昭和九年度成績

想 弹 (無 撒 布)				1 1 4 3 4 4 4 4 4 4 4 4 4 4 4 4 4 4 4 4		· A	· **	一灰ボルドウ液 四斗		共式築朝の農吏
六。〇五	ブ・四二		べき 三匹	ス・二四	: 六: - - 四	六-八九	六。四三	九	域	
0	.0	· Ć		0	0	0	0	○ 間	葉第一	Ì
0	0		. 0	0	0	\Q	0	○ ^個	棄第二、	苗
<u>о</u>	Ò	. 0		0	0	Ò		個	棄第三	稻熟
三一八	0	1.0		0	0		~ Q	個	薬第四	病平
=-	-0	0		0		0		一個	葉第	均病
0. 五	11.0	11.0	, 0	0		〇元			葉第六	斑數
- •	0.0	. 0	. 0	0		1.0			薬第	
八八	五七	1 • 11	0					○個	病- 斑- 数-	医
1	臭	。良	良	良	稍	稍	不		散落良齊	Ŋ
					良	良	良	臭	否搜	
1	なし	殆どな	有	有	なし	なし	なし	なし	害	
		L								

劑撒布後稻葉にての擴散力を檢するに「ボルドウ し、「コロイド」銅に於ては四斗式撒布區發病最も れに亞ぎ、八斗式及一石式液撒布は共に稍發病多 四斗式液撒布區發病最も少く、六斗式液撒布區之 前表に示すが如く石灰「ボルドウ」液に 濃度の低下に伴以發病率を増加す、 ありては 尚兩藥

> 液に比し、コ 〇昭和十年度成續 ロイド 」銅著しく良好なり。

三寸に伸長せる頃を見計らひ左記の薬剤を撒布せり。 通肥料(二)は昔通肥料の倍量を用ひて昔通の如く管理 試驗方法 神力種を坪四合播とし被害藁を被ひ、

葉に於ける全病斑数を数へ、發病の程度を比較せりの 調査方法 各區簽病中庸なる部分より五十株を拔取り、 各

3、「ボルドウ」液に加用すべき各種く稻熱病の發生を略完全に防止し得るものなり。乃至八匁式を用ふれば稻葉に藥害を生ずることな

濃度低下せば發病率を増加せり。「ブラス

液及び「コ

ロイド」銅なり。

而して叉各種の藥劑は

ŀ

」は各

石灰「ボルド

ウ」液に亞ぎ效果大なるは銅

石鹼

展着劑の加用量に關する試驗

照著にして銅石鹼液に比し廉價なると、稻葉に水 ・ 残存するを以て薬劑中最も理想に近さものなり ・ 残存するを以て薬剤中最も理想に近さものなり がれども「ボルドウ」液を稻葉に撒布せば、他の薬 然れども「ボルドウ」液を稻葉に撒布せば、他の薬 然れども「ボルドウ」液を稻葉に撒布せば、他の薬 加温の多少と防除の效果を比較せり。

明液の高さを測定して沈降の遅速を驗せり。液を三○∞入りの比重瓶に入れ一定時間後に不透過石灰「ボルドウ」液に加用し調製せる「ボルドウ」液に加用し調製せる「ボルドウ」液の沈降速

甲 四斗式過石灰「ボルドウ」液に加用せる場合の實驗

六六

〇昭和十一年度成績

をの藥劑を撒布せり。 苗代とし肥料は各標準肥料の倍量を施用し、 六月十九日左記濃度 苗代とし肥料は各標準肥料の倍量を施用し、 六月十九日左記濃度

て一莖平均病斑數を算出せり。

一、試驗成績

「コロイド銅」四斗式	同一石二斗式	同一石式	同八斗式	同六斗、式	「ボルドウ」被四斗式	薬剤の濃度	1 112
ニー・大	五			0	0.1	苗稻熱病平均	
○ -六	=	•	•	- <u>=</u>	O. =	水苗 代 数	

前	標	同	闻	同	銅	同	同	同	¬ ブ	同	间	同	同
をこ					石丛				ラマ				
下	標 準(無機				腋液				1				
する	無	头	八	+	4	八	六	四	English married	石	-	八	六
ZΠ													
	布)	式	武	关	式	式	式	式	孟	式	式	式	太
· 公		1					2			7			
重													
樂刻	29	0	ŏ	0	0			*				<u>ئ</u>	
此	四五	五	四			九	九		九	八	· bri	九	决
7													
反它													
ク	-	0	0	0	0	a a			i	à Pl	o THE	0	•
古さ	===					unmark			124		123	, 6	
7													

雜

錄

糖は は CK 黑砂 傾向 沈降 前 ンレ 粘度を大ならしむ。 曹達及 加 ボ 表 無量の は前 糖は を有す。 速度大なるも、 は加 F 示す ウ びバボ 共 増加は 0 から 液の 量 如 尚粘度に及ぼす影響を見 加用範圍 加 n の増加 用 ドウソ 却つて粘度を小なら 沈降速度を却て小ならし 量 展着 松脂曹達及 0 增加 に依りて大差な 内にては 1 劑 プ」は加用量の増 に伴 力 び ひっず ゼ 「ボル 加用量 イ n るに F F J 0 ウ るも 黑砂 ひる 增 ウ 灰 加 加 及

影響前記各種の展着劑を「ボルドウ」液に添加使②展着劑加用が「ボルドウ」液の擴散力に及ぼす

積を 用す 比較せり。 液を〇・五。宛滴下し乾燥せし後液の擴散せ 及ぼすやを驗せんとし、次 る場合 Planimeter を用ひて測定し液の擴散程度を ボ ド 九二年 一七つた ゥ 液 0 擴散 0 如 く硝子板上に前 如何 なる影響 る

'n

F"

ウ

プレ九

二七

ce ce ce ce

八

宝元

	同	同	黑	同	同	カカゼ	2
	Tanah Tanah	£	砂、糖一			マイン」石灰	展着劑加用量
	三〇タ	,1100匁	〇匁	八勿	六タ	四匆	-35
	八六	五四	= 1:	五三		女 〇	第一回
L	八七	四八	三上	五二	四六	10	第二回擴散面
	九三	끄	四〇	五三	六六	七〇八	第 三 回 (m ²)
	八八八六	四八。〇	三八・〇	五三,四	六四.0	六六-七	平均

六九

黑 砂 糖一〇匁	八	六タ	「カゼイン」石灰 四タ	加用量(する量・)十五	テリントに	乙六斗式過石灰	洞	同一个人。	つボルドウソープし九 cc	1 1 1 1 1 1		松脂曹達九克	同一三〇分	同三〇匆	黑 砂 糖 一〇夕	同八久	同六级	「カゼイン」石灰 四タ		加用量(する量)		鎌
三三十	至四	关金	₹cc ™	分三後十	不透	ボルドニ	1	盖	0.m.	二六・五	(LE-0	一、七・八	二二、五	三五五	ind .	一五・〇	三四・〇	元 五 〇	c 3	分十、		
大头	主	₹-	录cc	分四 後十 五	明液柱	ウ」液に加		八八十	一、八さ		九.四	一六:0	五·丸	八、五	-1.	一七八八	三三五	一 四 三	ec a	分四 後十	不差	
Tres	不	Trail -	ZE CE	分六後十	の高	用せる	• .	,	五五	一〇,四	八八八八二		四. 〇	四,九	九•三		(五)		ее	間一後時	透明液柱の高	
=	再	111-0	≓cc 大	五一分時後十	一液	場合の質	·) '		8			· · · · · · · · · · · · · · · · · · ·			ī Ā	7	、九	_	cc	十一分時	高さ(液温二	
o l/s		10-m	≓ec	十一分時		馺	Ž 1	35	-		· -E	九九		; <u> </u>	î, 7		•			後三十分時	八度)	
7	5 , I	次·玉	Öc Ö	十一分時	(C)			1, 3			P.	17					ヹ゠゙		cc	後五	Charles Charles Personal Control of the Control of	
10-1	- -	1 1	₹ ₀	後四 c 分二 後明) S) -t				ミーブ	三七フ	S E	E. P	4 六		十二分時後三		六八
3		10 H	i ii.	・ で する	を 通cc				·	4.	25 1 K 1 /		Nile Blue	· · · · · · · · · · · · · · · · · · ·	2	Lioht Grane	17 °	Paihd Methyi bide	110 1 35))	コギレドウー	
ij		1 1 C	是 四和	時間	るに無質											me Green		anyı bine	יו שן שויים	(夜の色分	

雜

錄

標	同	同	一ボ	间	同
			ドゥ		1.
w.			ドウソープ		
進			プレ		
無			0		0
散布	•○○合	〇・五〇合	〇二五合	-00合	〇・五〇へ
布	合	合	五合	合	合
			7		
Trial 0	0	0-11	1.0	0	0•H
温入六	0-11	0-1	0-1 0-M	0-11	0-14-
**	0-11 0-1 0	0-11 0-1 0-11 0-1 0 0-15	0.11	0 0-11 0-1 0 0	0-11-0-11-0 11-0
1	0	1.0	0 0	0	0
6	0	0	0	9	0
七六	0.1	0.*	0.*	0-13	0.*
T	0	4.0 0 .	0-11	0	04
ï	1.0	4.0	0-11 0-1 0	11.0 0	0-=
		0	. 0	0	0
1.	0 0	0	0 0 0 1	. 0	0
1	0	0 (Q	0	0
ij	0 0-1	0-1	M.0	0 0 0 1	0 0 0.€
3	11.	良	稍良	良	11
1	"	10	殆どなし	微少	4

展着劑中稻葉に 備 展着劑は「ボ 「ボル ルドウ ドウ」液の附着最も良好 」液一石に加用せる量を記す。

るも セイ 同撒布によりて

略完全に

苗稻熱病の

發生を防止し 發病を減ずるも、特に「ボルドウソープ」を加用せ 各種の展着劑共に一囘撒布區に比し二囘撒布區は ものなり。各區の發病程度を觀るに黑砂糖及び一カ なるは松脂曹達及び「ボルドウソープ」を添加せる のは一囘撒布區に比し病斑數を著しく減じ二 ン一石灰を加用せるものに比し松脂曹達及び ドウソープ」を加用せしもの發病輕微なりさ

> 得た (4)「ボルドウソープ」の加用量に関する試験 50

「ボルドウソープ」を石灰「ボルドウ」液に加用せば 決定せんとし次の實驗を行へり。 著しく減ず、然れども本劑の添加量多さに過ぎれ 附着最も良好にして、雨水に依る藥劑の流乏量を ば藥害を惹起することあるを以て、 添加の適量を

二五合の割合に「ボルドウソープ」を加用し發病程度を檢せり。 斗式過石灰「ボルドウ」液一石に付き一・五合、一合、○・五合、○・ 一、試験方法 神力種を多肥料の苗代に播種し稻苗五寸の頃四

試驗成績

小式一ボルド * ルドウッープ(加用量 ウニー石に付 0.二個 一個 () 五個 1000個 葉三 第四 第二 囘撒布區 数病平一 斑均莖 ○個 - 個 苗稻熱病平均病斑數 ○ 0・1 0・三 個 二囘撒布 图 〇個

葉二 第三 第四 第五 病斑 0 19個 良展 良 否の 柳 13

-1:

n

プレ九

Ŧî.

種を坪四

合 又は

の割に播種

稻苗 の五

寸に

伸長

せし

囘撒布し

当稲熱病の防除結果を比

代に

通

肥料二

一倍量

を基肥とし

7

施 用

五

===

加

1

用 加 脂 曹達・「

せるも

0

は

其

0 擴

添加 散力を小

量 の

増加に伴ひ擴散

力を著

有無は目

測

によ

8

黑砂糖を加

斑數を求め發病程度を檢せり、

尚 展着

の良否及び

績

别

回散布

葉第 四 五

數均一

病莖斑平

一回撒布

李

斑

曹

達

三〇〇タ加 二〇〇タ加

0-1

八〇タ加

タ加

)
知用

タ加

0

n 液

F

ウソ

1

プレ

は、 中

も加用量の増 ン」石灰・松

拔

取

5

全斑

數を數 方

へて平均病斑數及び 發病中庸

莖平均病

一、調査 60

法

各區

なる

部分五十

使用せる展着劑

力 何れ セ

ィ

大六十〇 四四十三

較せ 頃一

ウー ば、「ボルドウソー ボ ボ カゼイン「石灰加用區 に比し二 w w 液の濃度低下すれば發病率を増加す 表を通覧するに 尚撒· ドウソープ」と、カゼイン」石灰とを比較 1 世 ウ」液の濃度の低下は發病を稍々増加 六斗式 八斗式 布回數と發病との關係を觀るに一囘撒 石二斗式 石 囘撒 ルドウ 布區 プ」加用區にありては「ボ 0 同 發病は著し に比し増加の 撒布區 く減少せり。 割合僅少 囘 撒 ると 布區 ルド すれ かせり 共に な 6 布

然難「ボ ざる爲、不測の藥害を生ずることあ 誤らざれば藥害を生ずることなし。 るを以て前者に比し稍々高價なれども、 は四斗又は六斗式過石灰「ボル 一石に對し市販「ボルドウソー 松脂曹達は調製方法によりて時に製品の一定せ 以上の事實より考察するに、 つく徐 ルドウソープ」は製品の濃度略 々に注加し撒布せば 存期間長く、 ボ ドウ」液(石灰二倍 プ」一合を强く攪拌 苗稻熱病の豫防に n F るを缺點とす ウ」液の稲蓮 々一定し 加用量 居

液を附着せしむること最も大なるは松脂曹達及び 脂曹達・「ボ 驗結果を綜合考察すれ (6)アド 展 ウソー の ルドウソー 加用量に關する結論 フ」にして、 ばカゼイ プ」の中稻葉に「ボルドウ」 他は何れも前二者に比 ン石灰 以上の各種實 ·黑砂糖·松 生を略 に附

着良好に

して液

の残

々完全に防除し

得るものなり。

殆どなし

績 加 加 布區は發病の差甚だ大に 大なら、 く其差僅少 るものは然らざるものに比し苗稻熱病豫防 加用量 前表 用區は葉に僅かに藥害を生ぜり、以上の試驗成 によれば F ゥ を通覧するに「ボルド 試 液一 增加 撒布囘數と發病との關係を觀 なりの 驗 ボルド 石に付き五勺乃至一 に伴ひ發病少し、 成 加 ウソー 加用量 績 して二回撒布區は發病少 と豫防效果を比較するに プレの ウソー 加 然れども一合五勺 合にて良く 用量は フ」を加 るに一囘撒 石灰 の效果 用せら 、其の オ

目的を達し得るものなり。

(5)「ボルドウ」液の濃度と展着劑の加用との關係 ・ 試験方法 各種濃度のボルドウ」液は、稻葉に附 ・ 試験方法 各種濃度のボルドウ」液は、稻葉に附 短所を補はんと欲し次の如き試験を行へり。 ・ 、試験方法 各種濃度のボルドウ液を製し、該液一石に付「ボルドウッ」プ」を一合の割に加し、多肥料栽培をなせる稻苗に撒布ルドウッープ」を一合の割に加し、多肥料栽培をなせる稻苗に撒布ルドウッープ」を一合の割に加し、多肥料栽培をなせる稻苗に撒布ルドウッープ」を一合の割に加し、多肥料栽培をなせる稻葉に附

六匁加用し比較に供せり。

र्याः n ウソーフ 葉第 0.3 O ... 葉第二. 苗稻熱病平均斑數 0 00-1 0-10 薬第 三 囘 葉第 四 葉第 數均 病 斑 棄第 0.1 苗稻熱病平均病斑數 葉第 三 回 撒 葉第 四 布 葉第 五

雑

る所である。
る所である。
をは、
は、
は、
の
の
方
の
が
不
り
で
の
の
が
が
の
が
の
が
の
が
の
が
の
が
が
の
は
、
が
の
は
、
が
の
は
、
が
の
は
、
が
の
は
、
が
の
は
、
が
が
が
が
が
が
が
が
が
が
が
が
が
が
が
が
が
が
が
が
が
が
が
が
が
が
が
が
が
が
が
が
が
が
が
が
が
が
が
が
が
が
が
が
が
が
が
が
が
が
が
が
が
が
が
が
が
が
が
が
が
が
が
が
が
が
が
が
が
が
が
が
が
が
が
が
が
が
が
が
が
が
が
が
が
が
が
が
が
が
が
が
が
が
が
が
が
が
が
が
が
が
が
が
が
が
が
が
が
が
が
が
が
が
が
が
が
が
が
が
が
が
が
が
が
が
が
が
が
が
が
が
が
が
が
が
が
が
が
が
が
が
が
が
が
が
が
が
が
が
が
が
が
が
が
が
が
が
が
が
が
が
が
が
が
が
が
が
が
が
が
が
が
が
が<

(三) 柑橘果實の燻蒸に於ける荷造如何

が殺蟲力に及す影響試験(昭和八年度)を試験を行つたのである。

内外經過せる時に死蟲調査を行った。 方法 燻蒸容器はトタン板最り二○○立方尺の燻蒸室吊ひ

成績

營	745.	箱	箱	荷
TTYT.	箱バ	計無	詰	造方
照	ラ置	無	有	法
區	造	恙	蓋	
	<u>\</u>		Sala	- S施
10	110	10	<u></u>	HCN 尺量
1				
	Æ.	五.	Æ	· 時燻 問蒸
Management	0	0	○ 分	, 101348
	,			
· · · · · · · · · · · · · · · · · · ·	欠く	=	二 元 元。(温度
- 1		五	H.c	
			. 7.	死
0	九九	九五	九三%	蟲

社気所は深達生で乏しい様であるから、被燻蒸にバラに置いた場合が完全に近い死蟲率である。 にバラに置いた場合が完全に近い死蟲率である。 が可成り殺蟲力ほ影響を及す様である。即ち完全 が可成り殺蟲力に影響を及す様である。即ち完全

られる。 地瓦斯は深達性に乏しい樣であるから、被燻蒸 此瓦斯は深達性に乏しい樣であるから、被燻蒸

(四) 青酸瓦斯の矢根介殼蟲に對す

「一五、11○、11○分燻蒸をなす。 處理直後より九日迄觀察す。供試驗の方法による。 青酸は液體、容器は硝子デシケーターを用ふ試驗の方法による。 青酸は液體、容器は硝子デシケーターを用ふ試験の方法による。 青酸は液體、容器は硝子デシケーターを用ふ

雑

錄

青酸瓦斯燻蒸法に關する研究(四)

部岡縣立農事試驗場柑橘病害蟲研究所報告 農林技手 德

野

とが出來る。

燻蒸効力に関する試験

矢根介殼蟲の吸着部々位と 殺蟲力の關係(昭和一〇年度)

かにする為め行つたものである。 が異るか否かに就いては從來調査されて居ない。 本實驗は之を明 矢根介殼蟲は吸着部位に依つて、燻蒸に對する抵抗力

燻蒸後二〇日經過の時死蟲率を調査した。 供試蟲は雌成蟲である 死蟲調査は樹の東西南北より一方位頭以上宛探收した。 一、○○○尺立方に付き青化曹達三○○瓦を用ひ五○分間燻蒸し、 方法 大(七九四立方尺)、小(二三一立方尺)二本の樹を選び

九九% 小枝 一七年 九 九 四 八九 20% 主 当% 三十七 中山山

ぎ葉最も劣る。樹全體としては上部下部が死蟲率 小枝及春枝最も死蟲率高 く、果實之に次

高く中部は劣る。

る抵抗力に差のあるものであると云ふ事を知るこ 本成績に依れば、吸着部位によつて燻蒸に對す

燻蒸時に於ける氣溫が殺蟲 カに及す影響(昭和一〇年度)

きものと考へられる。氣温(+)と(一)が殺蟲力に及す影響を知る 爲めに本實驗を行つた。 概說 燻蒸時に於ける氣温の如何は當然殺蟲効力に影響すべ

定した。 蒸後二〇日經過の時に死蟲調査をした。 瓦斯濃度は開幕直前に測 を行ぶ。氣溫(一)は夜明けの低温時に行ひ、(十)は日中に行ふ。燻 方法 供試蟲は矢根介殼蟲にして、ポット法により野外燻蒸

績

の時に	結論	pq	Ξ			番號
比し	以	八〇	八〇	1110		施 TO00立
殺蟲	上の空	Q	O	Ö	Og.	党 立 方 尺
効力	成績	五〇	五〇	五〇	五〇分	時燻 間蒸
甚だ	に依		*		1, 	實
劣る。	る時	七九	1.1	四三二	二二大	測藥量
尙	は、に	四 (五		九g.	
ほ瓦	氣溫((十) 九	-	(十)人	氣
斯の	()	<u>~</u>	五	arryth Witness	九℃	
發生も	は(+	六五	九〇	四六	九 三%	殺蟲率
D						

<u>چ</u> ه

施行時刻 測定位置 E 1 • 0 五四·〇 五二。% 二二五 八・〇 五. ٠: ١ = 1 · 0 五四·〇 五三・〇 八・〇 一八。三 四五 四五・〇 五八・〇 五。八 Li. 五五・〇 0.11. 五四·〇 - LI-0 10·0 五四·〇 七三・〇 一七: 八十三 五分 五二・〇 五九·〇 七三・〇 二三・パ 九・〇 一六・八 - m-0 五〇・〇 二四·五 五八・〇 一九·五 二五分 近五・〇 三七.0 五七・〇 一六・八 五〇・〇 一、五・〇 = : 九.八 三〇分 近〇・〇 二〇・五 七一・〇 三五・〇 五七・〇 二五・三 三五分 -1:0 一三・八 夏內溫低 三五・〇 二五·三 四〇分 六0.0 せたい 四九〇 - 4.0 濕 溫濕別

度

废

外温と大差がなくなる。 結論 内溫は時間の經過と共に上昇し一五分頃には 夏の 場合溫度は外溫より內溫は常に低 E

り増加し初め、 夏の場合濕度は外濕常に低く、內濕は五分頃 時間の經過と共に内濕と外濕との t

差は大となる。 より増 經過と共に上昇して內外の差は益々大となる。 冬の場合温度は外温 冬の場合の濕度は外濕常に低い。 初め 時 間 の經過と共に内外の差は大とな より内温は常に高く、 内濕は五分頃 時間

> 内温高さは應用上理想とする所である。 之を要するに温度にありては、

錄

靑化曹達又は靑化加里中の靑酸定量 青酸劑の分析法

(1) (a) N/10 硝酸銀液 加 或は重量法に依り鹽化物を秤量して定む。 里又は純鹽化曹達に對し滴定に依つて規定度を定めるか、 重クローム酸加里を指示薬とし、純鹽化

(で)炭酸鉛 (b)五%アンモニャ水

醉醒後二 麻 日 醉程後三 麻 日 醉酣後四 步麻合醉

備考 U-llmg/L-0-Hmg/L' のものは麻酔 せるものは無かつ 八九。 —±•0 るえ *

は最短一日、最長四日である。 より稀薄になるに從つて麻醉步合多し。 〇・三 mg/L 五分を以て致死濃度とす。 致死濃度以下に於てのみ麻醉す。 以上の成績に依る時は、 て明かに麻醉するものと認む。 卽ち歩行幼蟲は 步行幼蟲は青酸 麻醉期間 致死濃度 孰れ

たことを附記しておく。

の調査 燻蒸時に於ける天幕内溫濕度

直前は天幕被覆の直前を意味する。

(一) 夏季及冬季燻蒸に於ける天幕

七六

燻蒸實施上の参考に資せんが為め此實驗を行つた。 の關係等に就いては未だ調査研究された文獻がない様であるから は、既に調査された業績があるけれども、溫濕度の變化及び外溫と 野外燻蒸時に於ける天幕内の瓦斯濃度の變化

り所定の時間に温濕度を測定した。 天幕内に青酸瓦斯を投入しな い場合の試験とする。 方法 常法に從ひ天幕を被ひ、中心中央に温度計及濕度計を吊

A、夏期八月に於ける試験

(天幕內 一天幕內 " 外 宝-宝 表・0 表・0 八一五 八十 八八 八一八一八四・0 八四・0 八八・0 四1.0 三1.班 四1.四 四四.班 四四.四 四四.八 四班.四 四班.班] 三十0 三十三 三三・0 三三・五 三四・0 三三・八 三三・五 五五-〇 五五-〇 五五-〇 七〇-〇 七〇-〇 六四-〇 六四-〇 五九-〇 NE-0 ME-0 ME-0 ME-0 MM-0 MM-0 MM-0 三四。我 三四。我 三四。我 三四。我 三四。我 三五。我 三五。在 三六。〇 直前 七七-五 八七·〇 九二·五 九〇·〇 九二·〇 九〇·〇 九〇·〇 分 五分分〇 Ŧî. の温別湯

- B. にて二立となる物を用ひ豫め標線を付ける事)。 二立定容フラスコ (普通フラスコを使用する場合は首部
- C. 字形吸收管にして別に之を支持する適當なものを必要とす 五%アンモニャ水約五ccを入れた長さ五寸の三球付き V

コック

- D. 之には塵芥類の吸ひ込む虞のない様に二重ガーゼにて被ひ をしたロートを付ける。 吸收管に連結し他の一端は天幕内の瓦斯捕集位置におき、 肉厚赤ゴム管にして(外徑一cm. 内徑○·六cm)一端は
- 砂襄
- 天幕內

水中を通り、青酸瓦斯は之に吸收される。 る時は天幕内の空氣脊酸瓦斯混合物二立がじの五%アンモニヤ 瓦斯捕集時に至つた時はDを開きAの水二立をBに落す。然

所要量比較的少き故に、五のミクロビューレットを使用するを 中に水を以て良く洗ひ込み、二〇%沃度加里液敷滴を入れて N/20 硝酸銀にて滴定する。但し此の滴定にあたつては硝酸銀の 次に此の青酸瓦斯を吸收した吸收管を二○○○三角フラスコ

する 倘一般に青酸瓦斯濃度は空氣一立中の青酸數 mgrを以て表示

(1)試

- a 苛性曹達液 苛性曹達五瓦を氣に溶解して一立とする
- b 硫酸五%液を作る。
- \hat{c} 重炭酸曹達液、飽和溶液を作る。
- 釋する。この液の規定度を定めるには澱粉糊を指示藥とし・ 沃度二・五瓦を秤量しその倍量の沃度加里と良く混和し、少 **稀釋する)に對して滴定を行ふ。** 懈させる。冷却後五○○℃の定容フラスコに移し標線まで 濃硫酸一○℃を含んだ一五○→二○○℃の水を加へ煮沸溶 標準亜砒酸溶液(純亜砒酸二五を秤量してビーカーに移し 量の水に溶解、濾過した後定容フラスコを用ひて一立に稀 沃度液○・○二乃至○・○一規定液を作る。即ち純粹の

倘沃度液は其規定度を時々檢定補正しなければならない。

- (e) 石油エーテル
- (土) フェノールフタレイン液、フェノールフタレイン一瓦 を九五%アルコール一〇〇cに溶解する。

(2)定量法

二五のに滿す。次に之より五のを小型フラスコ又は小型三角 ールフタレインに對し僅か酸性にした後、更に重炭酸曹達飽 フラスコ(内容一五℃)中に採り五%硫酸を滴下し、フェノ を通ずる。吸收管内の液は二五の定容フラスコ中へ洗ひ込み を〇・五%苛性曹達液約二の宛を入れた二個連結の吸收 管中 檢體(空氣、青酸瓦斯混合物)の一定量(一○○cー二○○c

雑

(d)沃度加里 結晶物又は二〇%水溶液

置いて行ふを便とする。 置いて行ふを便とする。

反應は次の方程式を以て表される。 N/10 硝酸銀の所要の数より試料中の青酸百分率を算出する。其

$$\begin{split} 2 \text{NaCN} + \text{AgNO}_3 &= \text{NaCN}, \text{ AgCN} + \text{NaNO}_3 \\ \text{N/10 AgNO}_3 \text{ 1c.c} &= 0.005202 \text{g CN} \\ &= 0.005404 \text{g HCN} \end{split}$$

二、青酸石灰中の青酸定量法

(2) 定量法

(1) 試

藥

一の場合に同じ。

生するものである。 青酸石灰(a(CN): は空氣中の水分と結合し青酸瓦斯を發(a) 錠劑の場合

Ca(CN)2+2H₂O=2HCN+Ca(OH)2

Ca(CN)2+2H₃O=2HCN+Ca(OH)2

くして思はしくない。故に之を秤するには約 五瓦見當の塊状物を其儘秤量管内に入れて种量し、 次に之を乳鉢に移し 五%アンモニャ水を入れてから乳棒によって 之を良く碎き五〇〇00定容フラスコに洗ひ込む。 硫化態硫黃存在の虞ある時は少量の炭酸鉛を入れ、二〇—三〇分間時々振盪した後水を以て標線まで稀釋し、乾燥濾紙にて濾過し之を供試液とする。以下一の場合と同じ方法を以て 2/10 硝酸銀にて滴定を行ひ百分率を算出する。

(b) 粉劑の場合

速かに秤量管内に約五瓦を秤取し、 五%アンモニャ水を 地の場合と同一方法を以て處理すれば良いのである。 併 しながらサイアノガス(Cyanogas)の或る物のやらに、粉劑 にして特に多量の硫化應硫黃を含有するものがあるから、 にして特に多量の硫化應硫黃を含有するものがあるから、 があるのに對しては炭酸鉛を充分に入れ完全に之を 沈澱さ せるを要する。

ずる。此の場合に於ける瓦斯捕集裝置を圖示すれば次の樣である○○○)を五%アンモニャ水を入れた吸收管(或は吸收瓶)中を通檢體 (空氣'青酸瓦斯混合物)の一定量(一'○○○○一二'○○

金五十圓を交附し病害絶滅を期すること」なった。 遂に決定し先ず管下の耕作實行園中七部落を選定して病害防除 中にあつたが、最少限度の費用を以て最大限度の効果的對策を を蒙りつゝあるを如何にして救濟すべきかにつき再々協議研究 千人の煙草耕作大衆が年々世萬圓といふ巨額に昇る煙草病蟲害 模範部落たらしめんがために右の各部落實行圏にこれが獎勵

毛蟲麥を喰ふ佐賀縣の被害 息して冬籠りをしてゐたが、春の訪れと共にそろく、這ひ出て 間部の隅々まで擴大して桑根、格菓、ラミー葉その他農作物を 喰盡した毛蟲は近年にない厳寒中も茶樹の集隆や枯草の中に棲 見てゐるので、これが驅除撲滅の徹底如何は本年麥の收獲に大 ま放任する時は麥は勿論、桑、楮の發芽を喰盡す惧れがあつて 目下麥の葉に寄生し葉先を次第に喰荒しつゝあるので、このま 影響するものと縣下各農村に注意を呼びかけてゐる。 既に南山、 北山 小關、三瀬各村の山間部一帶では麥の被害を 昨夏來佐賀縣下の平坦部は勿論山

桑園のスキ蟲狩新法 を株間に押し込んで親蟲を燒却する方法をとつてゐたが今囘濱 この對策には最も考慮しこれまでは晩秋落葉期に藁、古新聞等 全桑園の三割五分を占め然も毎年被害は増加の傾向にあり縣も あるひは ールを塗つた所に多数のスキ蟲の蛾が附着してゐるのを見た 、ある、或る日同技手が田舎道を通つてゐた際新築してコール 一技手により偶然の機會から極めて有効な方法が發見されたの ヒントで 7 2 爾來研究の結果、 7 一ル等を入れ年二囘八月上中旬九月十日前後 スキ蟲の本縣の被害は二千餘町歩に達し 口の廣い皿にクレゾール石鹼液

> で目的を適確に果せる。 方法によれば手間もかゝらず經費も一反步あたり一圓二十錢位 る方法で實驗の結果一番多い日で一日に四百二蛾を誘殺、この 各十日間桑園の五六尺の高さに置き親蛾を臭氣によつて誘殺す

◎麥の雪陰れ發生 てゐる。 大に上つてゐるので縣下町村農會ではこれが對策に大童となつ と稱してゐる菌核病が全面的に發生したのに加へて、雪が多か つたゝめ野鼠が果樹、桑園、麥畑等を散々に荒し廻り、被害甚 融雪期に入つて岩手縣下の麥作は俗に雪腐

昭和十四 和 十四年 年 四 月 發 £ 24 行 所 印刷納本 東京市瀧野川區西ヶ原町八 (外地定價>> 拾九錢) (定價一册>>拾五錢) (定價一册>>拾五錢)

昭

電話駒込(82)〇七八振替口座東京一四七五 番番

進

印 即 刷 刷 行輯 所東 者東人兼 京 京 市麴 市麴町區紀尾井町 東京印刷株式會社麴町出張所 野區紀 **英井町** 三番 地 郞

和液にてアルカリ性にする。

報

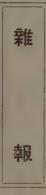
次の方程式に示すやうである。

、大に同供試液五のを別の小型フラスコに採り、フェノールをから指式に示すやうである。
、に前回と同量の重炭酸曹達飽和液を滴下する。次に指示薬として石油エーテル約一のを加へ振盪しつ、沃度液を滴下して更いを回と同量の重炭酸曹達飽和液を滴下する。次に指示薬と、更のが発表に示すやうである。

 $HCN + J_2 = JCN + HJ$

来る。

「規定沃度液 Icc=0.013508gr HCN (了) 「規定沃度液 Icc=0.013508gr HCN

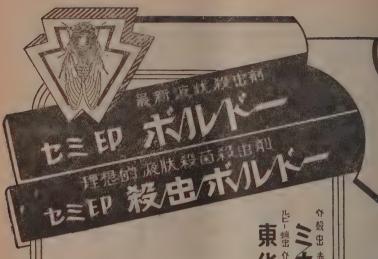


萬圓、泥夏蟲防除費六三、七五○圓を認められ 結局稽熱病害蟲米三○○萬石增産策として稻熱病薬劑費三六萬圓、螟蟲誘鯸燈費二四門に一○○万石增産を計劃し之れに伴ふ經費稻熱病防除費一囘更に一○○万石增産を計劃し之れに伴ふ經費稻熱病防除費一囘更に一○○万石增産を計劃しえれに伴ふ經費稻熱病防除費一回更に一○○万石增産策として稻熱病薬劑費三六萬圓、螟蟲誘鯸燈

成費等あり。 防除助成費は一○一萬三六二五圓となれりと云ふ。外に指導助

八〇

- ○不田榮吉氏機事功勢賞を受く
 可一を助成し防除を指導すること既報の通であるが石灰硫黄合劑を入れる容器たる石油空罐不足の爲配給離の處あり就ては材料を購入し共同調製を計る等萬全の策を講ずること肝要なり。
 ○不田榮吉氏機事功勢賞を受く
 朝鮮及自調製を計る等、人と雖もなるべく早く手配さるのありて多少容器は緩和せらる」と雖もなるべく早く手配すること肝要なり。
- ・産同業組合長を始め出張所並に同業組合技術指導部では管下六の立枯病で年三十萬圓 飯野太田專賣局出張所長菊池水府煙草生



- ▲セミEP 水ミル 殺 虫剤(テリス剤)
- ▲ プエ/ トロン (除虫菊剤)
- ▲其他農薬一般

種苗カタログ無代進

坂田商會農藥部 横浜市西平沼町 電翻線川(93236.3237.3238 振替·横浜 428

試驗場技師 農學博士 島君三蓍 增訂再版

した。 致しました。 腐朽菌と外園 各種の病害(三)樹木の外科的手術法(四)上木建築方面の緊急問題たる木材 木材腐朽論に大別し 多數の寫眞圖と實驗圖を掲げて 平易正確に詳述されま 結果を基礎として、 著者は樹木の病害及木材腐朽い研究に從事すること二十餘年、其豐な研究の の成果たる「マツ類の事變菌」に關する記載を數十頁に亘り增補し面目 態等に闘しては全然著者獨特の記載で、殊に再版に當つては著者獨自の研究 就中、 本書の特色とする(一)菌根と木材との關係(二)寄主に對する 植物病理學研究家は何を措いても備ふべき新著です。 の關係、木材の腐朽性、家屋用材の乾腐及各種木材腐朽菌の形 編を樹病防除の理論と方法、根瘤及菌根、 樹病各論、

正 價 五副八上後 菊判布裝全一冊・五三○頁・圖一 第一編樹病防除論 價五圓八十錢·內地送料三十三錢 九〇版

朽論 病害〇第三章濶葉樹の病害 ○第一章根瘤○第二章菌根 の撤布第二編根瘤及び菌根に関する問 防除方法○樹病の間接防除法○第二章藥劑 質の關係〇第十章木材の耐朽性試験〇第十 法〇第八章木材の耐朽性と之が理化學的 章木材の防腐○第七章木材腐朽菌の人工培 ○第五章乾腐と木造洋風家屋の腐朽○第 ○第四章木材腐朽菌の高熱に對する抵抗力 色〇第二章木材腐朽菌の發育と環境の影響 養〇第八章木材防腐劑の殺南濃度及試験 章各種木材腐朽菌の形態〇増補〇索引 ○第一章竹林の病害○第二章針葉樹 ○第一章木材腐朽○第二章木材の ○緒論○第一章樹病の 第四編木材館 第三編樹病各

蟲 龘 防 除 防 **(7)** 除 法 **使三・八〇丁・** 三 矢後 正俊著 價石 價三・八〇一・壹 井 -101 悌

驗實

作

物

病

噩

瞾

優七八〇丁・壹

施

微生物及植物病理學實驗法

瀧元 僧四·双〇丁·三 清透

著 驗實

作

物

病

治居

使ハ·並OT·量中田覺ュ郎著

=

本

南

原

攝

祐

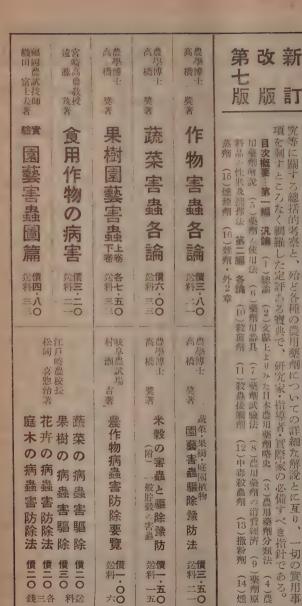
川石小話電\○七町川森區鄉本市京東 六/番〇〇七五二 京東 簪振

發 所行





(肥日大元) 社會式株業工學化產日



充等に 關す 本書は 舊版 を 全面的 始ど各種の農用 で、 、 併究家・指導者・實際家の必備すべき指針で、 農用藥劑並にその原料・製法・使用法・作

項

を刺すところなく網羅

る總括的考察と、

7次概要

(1)總論

みた日本農川

小樂劑略史

(3)農川藥劑分類法

一切の實用事法・作用・研

ある。 (4) 農 (14)燻

た定評ある寶典で、

別紙菊門數洋圖 送定挿 料價入圖 五圓版 三世五十二三章

内

錄目書圖

料送

錢三各

進

一五 五〇

一町錦區田神市京東 〇九一三一京東替振

二五一〇



(略號セスフ

病・本気ノ真 從來水田用 メ得ザリシモ本機ノ出現ニョ ク二三反歩ニ過ギズ且ツ噴霧ノ狀態粗弱 ベノ眞價 人員三名ニテ一日ノ行程實ニ二一三町步、 ハ主トシテ水田用ニ供ス 革新的時代來ルトノ激賞ヲ博スルニ到 二、旣 ハ多ク背負自働式ヲ使用 -數年來實驗諸氏 リ之等ノ不備ヲ解消シテ餘ア ノ證明

ハスル

モ其撒布

能力一 効果

日漸

ノ為豫期

併モ高强平均

セラル

處

ニテ

稻.

實ニ一石二鳥ノ優秀機ナリ 個別が別の場合

ノ壓力ニョリ蘗劑ハ微細ニ展着シテ豫期ノ効果ヲ舉ゲ

(カタログ贈呈)

贖 田牛

七五一町光三金白區芝市京東 四四六七一京東座口替振 品 質 本 位

禁農を明三



下高明 元 元 元 發

六三三,五崎大東区川品市京東 所品製學化明三崎大京東 所造製

我國唯一の農業抄録雜誌

農港研究

全農界の一般雑誌・學術雜誌

官廳・大學・專門學校・試驗

場の報告論文など隔絶秘藏

文献の要領を蒐めた大寳庫

一ケ年 誌代 四・二〇 見本御請求三十七錢を要す **一 册三十五銭** ・ で で 一 の ・ 二〇

抄

鍂

擔

業學造濟育

山安藤原二西永辰庄清佐作小後川遠植明 崎田田鳥國川澤已司水藤間島藤見藤村日 不 一誠宗重二五勝忠英 敬恒俊道禛清治秀 夫二利彥郎郎雄次信滋二生文生一藏郎文 氏氏氏氏氏氏氏氏氏氏氏氏氏氏氏氏氏氏氏氏氏氏

勞力と費用の節約!

月々多数の雑誌その他入手 因難の刊行物を求める事が 本誌一冊の購入で代行でき るならば、或は少くともそ の一部だけでも省けるなら ば、その費用とこれた讀破 せんとする勢力負擔の輕減 が如何に大きいかは申すま でもない。

研究の合理化!

所要の研究事項は本誌を索 讃して、直ちにその要領だけな摑む文献の活用、研究 の最短距離はこれ以外にない。

會行刊書圖業農 吾一六九五三京東蒂振 所 行發

獨 逸 I 12 製農業 一、財産



根 用斗二石一子種麥 瓦 ウ Ŧī. 拾 ス プ N

九九九九五四三二

リア店賣販=地各國全 會合

社

資 茅場(66)

11

ン

0

香口

座東

驗試較比毒消子種麥小 日十二月七續成場驗試 七年二十 事農立縣 用使ンルプスウ左 用使無右

せすっ

岡

山、愛知、群馬、千葉、奈良、茨城、神

奈川 を賜

其

他

種作物に

有効確實です。

詳

細

は説明書で御覽下さ

收確實、 に生育强剛の

左記

各縣農事試驗場

の有効御推薦

0

て居 0 增

爲め雪腐病

をも防除し得て二割內外

今秋 は是非麥作に御 價金貳錢內外 使ひ下さ

御

中込

次第急送致

ますっ

v

麥種子を本劑 変作に 0 きて 千

腥黑穗病(2)班葉病(3

)腐敗病を完全に豫防

す n

3 ば

と共

一倍液に

て三十分間

浸漬消

毒

す

1

藥農

具 農

自完動全 植植植 植 植 撒園植 木 木 木 木 武 式 式 式 粉 式 式 4 背 車 植木式空氣自動背負型噴霧器 特 变 輪 輕 動 製 動 4 付 器 自 便 カ 肩 自 具 高 掛 動 壓 噴 囕 噴 噴 霧 霧 霧 器 器 器 種 種 呈進錄型及書明說

横浜市中區唐沢十五番地横濱植水株式曾和



郵稅一錢 三外 一十九錢

劑虫

普

鹼狀

壹瓦●時價五圓

